

ORIGAMI

TANTEIDAN

折紙探偵団 MAGAZINE

クローズアップ Close-up

吉野一生氏の動物作品創作過程 発想体系を想像(妄想)してみる

Imagining How Yoshino Issei Created His Animal Models

北條高史

Hojo Takashi

折り図 Diagrams

ポメラニアン

Pomeranian

勝田恭平

Katsuta Kyohei



展開図折りに挑戦！ Crease Pattern Challenge!

バレリーナ 北西一貴

Ballerina

Kitanishi Kazuki

恐竜の頭骨 菊地柾斗

A Skull of a Dinosaur

Kikuchi Masato

つまみおり Information

第11回折紙探偵団名古屋コンベンション参加受付開始

Registration Open for the 11th Origami Tanteidan Nagoya Convention

通巻 **165** 号

日本折紙学会 (JOAS) の理念

The Purpose of Japan Origami Academic Society

第一章 名称と目的

第一条 会の名称

1. 本会の名称は日本折紙学会とする。
2. 本会の英語での名称は、Japan Origami Academic Societyとする。
3. 本会の略称は、JOASとする。

第二条 会の目的

1. 本会は、折り紙の専門研究と折り紙の普及の促進、ならびに、それらを通しての広く国内・外の折り紙愛好家との交流の促進を目的とする。
2. 第一項の折り紙の専門研究とは、折り紙の創作、折り紙の創作技術の研究、折り紙に関する批評・評論、数学研究、教育研究、歴史・書誌研究、知的財産権等の研究、工学・商業デザインの研究等を意味する。
3. 第一項の折り紙の普及とは、折り紙の社会的認知度の向上活動、折り紙愛好者層の拡大活動、折り紙に関する人材の育成と発掘等を意味する。

規約第1章より抜粋

Chapter 1: Name and Purpose

Article 1: Name

1. This society is to be called Nihon Origami Gakkai in Japanese.
2. This society is to be called Japan Origami Academic Society in English.
3. The abbreviated name of this society is JOAS.

Article 2: Purpose

1. The purpose of JOAS is to promote studies of origami, diffusion of origami, and both domestic and international association of all origami-lovers.
2. The studies of origami mentioned above includes designing, designing techniques, criticism, mathematical studies, educational studies, history, bibliography, studies of the intellectual property rights, studies of industrial and commercial design, and so on.
3. The diffusion of origami mentioned above includes widening appreciation of origami, expansion of the community of origami-lovers, scouting and rearing the origami talent, and so on.

●折り方の約束記号 SYMBOLS FOR FOLDING

谷折り線
Line indicating valley fold

山折り線
Line indicating mountain fold

手前に折る
Fold paper forwards

後ろへ折る
Fold paper backwards

折り筋をつける
Making a crease line

段折り
Pleat fold

裏返す
Turn paper over

引き出す
Pull out

図の見る位置が変わる
Rotation

図が大きくなる
A magnified view

見えないところ
A hidden line

押す、押しつぶす
Push paper in

切る
Cut

「ポメラニアン」(P.26)

作: 勝田恭平

Pomeranian (P.26)

by Katsuta Kyohel

■「元の形状を、いかにしてシンプルにデザインし直すか」という観点・方向性の作品が多くなった題材。それに対して本作では、「各部の特徴的な立体感」の表現可能性に真正面から取り組み、大きな成果を得たと言える仕上がりになっています。

(解説: 北條高史) Comments : Hojyo Takashi

ORIGAMI
折紙探偵団
MAGAZINE
CONTENTS

No. 165



Pomeranian: Katsuta Kyohei

クローズアップ / Close-up

P.13 吉野一生氏の動物作品
創作過程 発想体系を
想像(妄想)してみる

Imagining How Yoshino Issei Created
His Animal Models

北條高史
Hojo Takashi

折り図 / Diagrams and Crease Pattern

P.26 ポメラニアン

Pomeranian



勝田恭平
Katsuta Kyohei

P.38 展開図折りに挑戦!

Crease Pattern Challenge!

恐竜の頭骨

A Skull of a Dinosaur

菊地柾斗

Kikuchi Masato

バレリーナ

Ballerina

北西一貴

Kitanishi Kazuki

カラーページ / Color

P.20 オリガミ・フォトギャラリー

Origami Photo Gallery

今号の折り図・展開図掲載作品より
Models Based on Diagrams and Crease
Patterns of This Issue

解説・北條高史
Comments : Hojo Takashi

折り図 / Thematic Series with Diagrams

P.4 ユニット折り紙カルテット

Modular Origami Quartette

ポーラス
Porous

川村みゆき
Kawamura Miyuki

P.8 おりがみ我楽多市

Origami Odds and Ends

クレマチス・フタつきトレイ
Clematis, A Tray with a Lid

やまぐち真
Yamaguchi Makoto

P.16 折紙図書館の本棚から

マルシオ・ノグチ
Marcio Noguchi

From the Bookshelves of the JOAS Library

『The Paper』OrigamiUSA機関誌の過去、現在、将来
The Past, Present and Future of the OrigamiUSA Magazine
“The Paper”

P.18 ぼくらは折紙探偵団

Here We Are, THE ORRIGAMI TANTEIDAN

紛らわしい(?)折り紙用語
Polysemy in Origami Terms

小松英夫
Komatsu Hideo

コラム / Columns

P.7 折り紙の周辺

Origami and Its Neighbors

布施知子
Fuse Tomoko

P.36 おりすじ

Orisuzi ("Fold-Creases")

上原隆平
Uehara Ryuhei

P.37 折紙三昧

Origami-Zanmai (This Origami and That)

西川誠司
Nishikawa Seiji

情報 / Information

P.40 つまみおり

Rabbit Ear

折紙探偵団名古屋コンベンション参加受付開始

Registration Open for the Origami Tanteidan Nagoya
Convention



川村みゆき
Kawamura Miyuki

やわらかユニット物語2

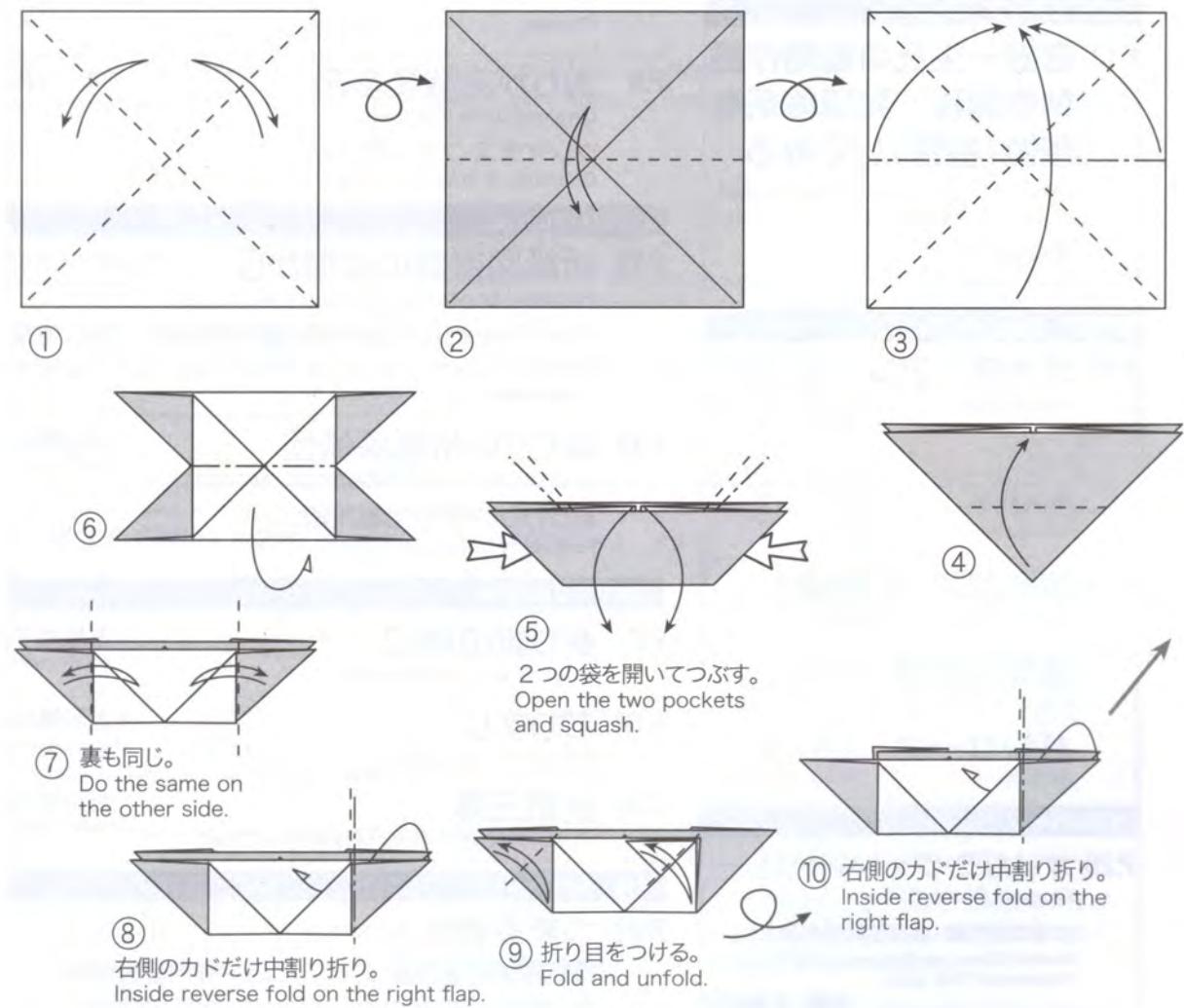
第5話 ○△□ (まる、さんかく、しかく) Circle, Triangle, Square



完成作品には円形の穴がありますが、穴の根元は実は三角形。ユニット自体は正方形の紙からできています。形はそれぞれ違っても、関連があるのです。

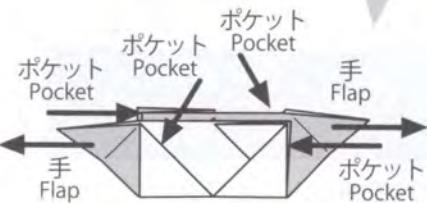
There are circular holes in the completed model, but the base of the hole is actually a triangle. The module is made of square paper. Even if the shapes are different, they are related.

【ポーラス】 POROUS



組み方 /Assembly

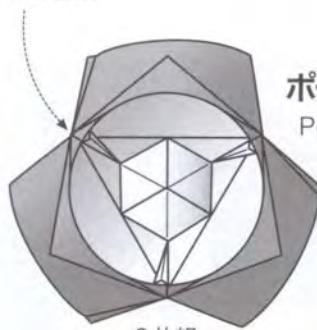
⑪ 折り目をつける。
Fold and unfold.



「ポーラス」のユニット

The POROUS module
同じものを 6個作ります
You need 6 modules.

ここは3つの
ユニットで
できています。
This point is
formed by 3
modules.



6枚組
6 modules

ポーラス
Porous

① 差し込む
Insert.

② 左右のユニットを引き寄せて密着させ、
カドの先端がポケットの一番奥まで届く
ように折り込む。
Pull the two modules closely together,
fold and tuck the flap into the pocket.
※ピンセット等を使ってカドの先をポケット
の奥までしっかりと押し込んでください。
Please firmly push the tip of the flap
into the pocket with tweezers etc. .

③ 3つめのユニットも
同様に組み、丸い筒状
に形を整える。

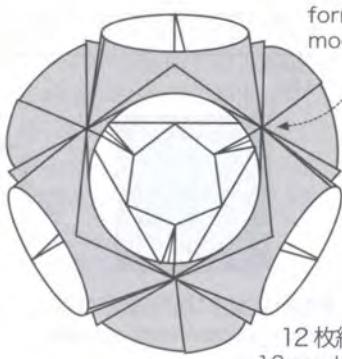
The third module is
also assembled in the
same way, and make
a round cylindrical shape.

ポーラス
Porous

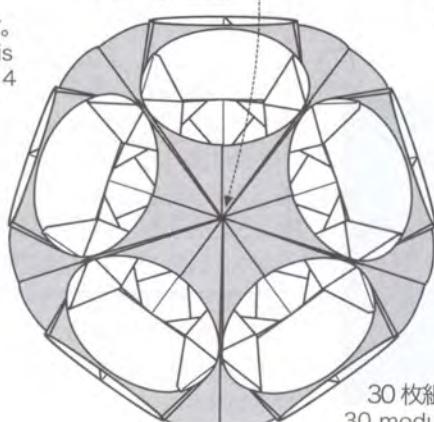
④ 残りのユニットも同様に組んでいく。
Insert the other modules in the same way.

ここは5つのユニットで
できています。

This point is formed
by 5 modules.



12枚組
12 modules



30枚組
30 modules

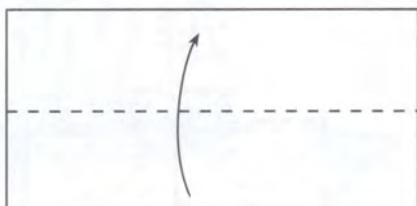
12枚組
12 modules

ここは3つの
ユニットで
できています。
This point is
formed by 3
modules.

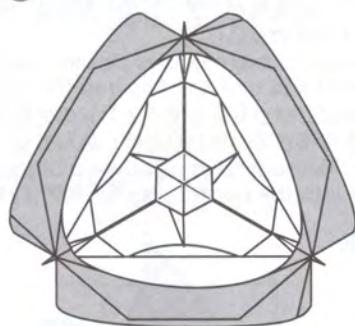
ここは4つの
ユニットで
できています。
This point is
formed by 4
modules.

30枚組
30 modules

※長方形用紙でも作れます。
you can use rectangle paper too.



①



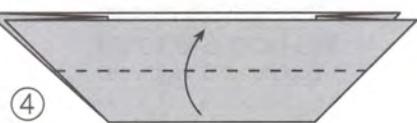
6枚組
6 modules



②



③ 中割り折り。
Inside reverse fold.



④

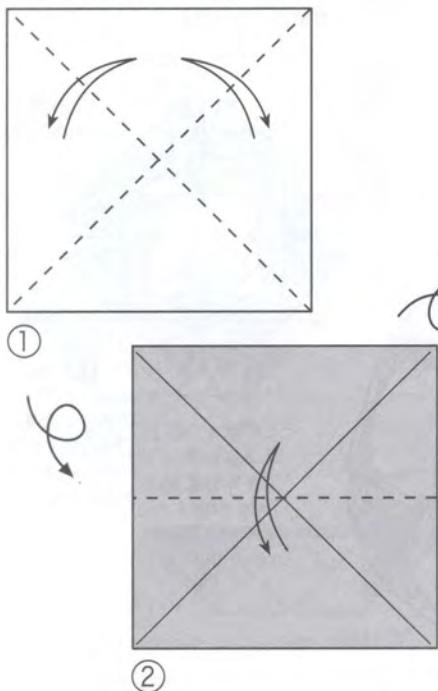


⑤

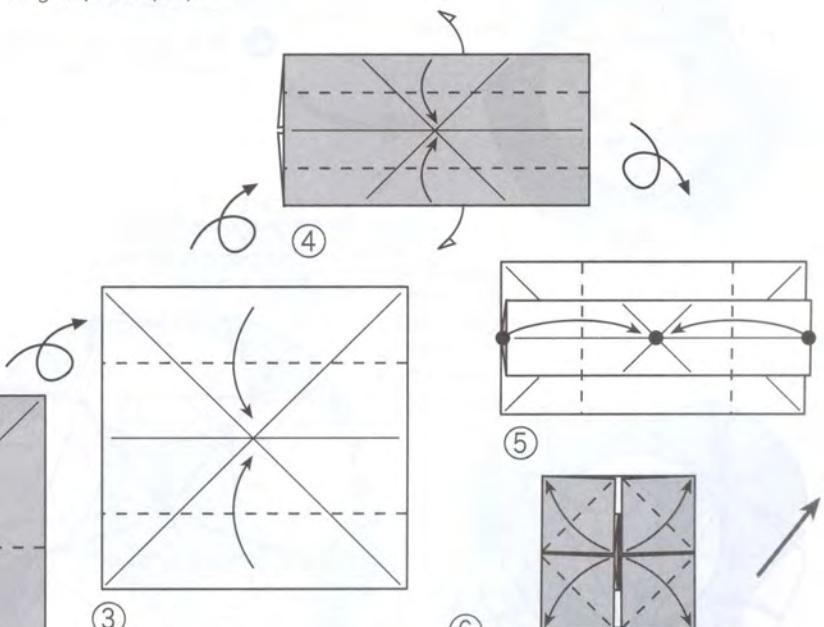
以下、⑤～⑪と同じように折り、同様に組み立てる。
Do the same steps ⑤ - ⑪ and assemble the modules on the same way.

アレンジ / Arrangement

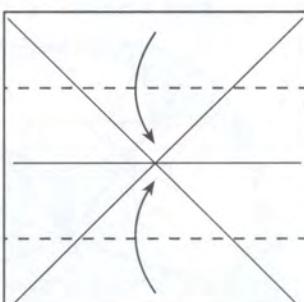
【ポーラス2】 ©2017 川村みゆき (KAWAMURA Miyuki) POROUS 2 創作日 (Designed) 2013/12/19



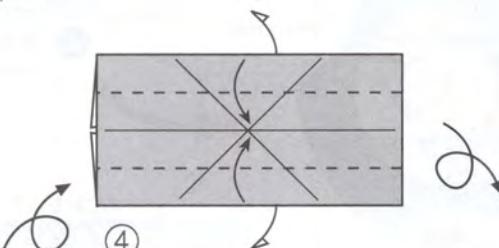
①



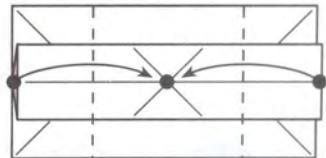
②



③



④

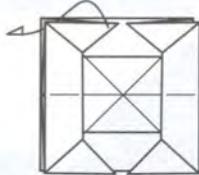


⑤

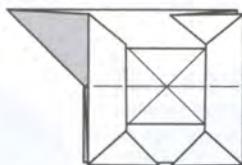


⑥

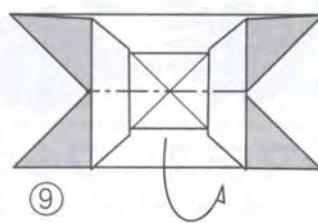
カドを折り開きながら袋をつぶす。
Fold the corners and squash the pockets.



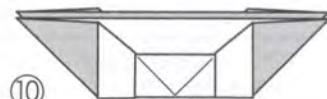
⑦ カドを引き出す。
Pull the corner out.



⑧ 他の3カ所も同じ。
Do the same on the
other three corners.



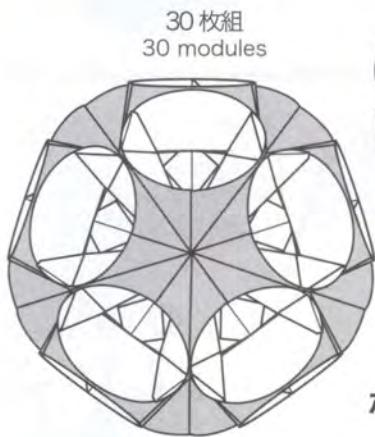
⑨



⑩

以下、ポーラスの⑦～⑪と同じよ
うに折り、同様に組み立てる。
Do the same steps ⑦ - ⑪ of
the Porous and assemble the
modules on the same way.

※ピンセット等を使ってカドの先をポケット
の奥までしっかりと押し込んでください。
Please firmly push the tip of the flap
into the pocket with tweezers etc..

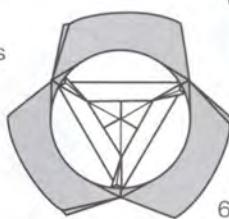


30枚組
30 modules



12枚組
12 modules

ポーラス2
Porous 2



6枚組
6 modules

折り紙の 周辺

第84回 インスタレーション Installation

Origami and
Its Neighbors

布施知子 Fuse Tomoko

北アルプス芸術祭が終わった。

終了後に作品を点検すると、虫のフンやその他のごみが無限折りのじやばらのひだに溜まって、シミになっている部分もあった。とくに床に平らに広げた作品に多かった。それを掃除しながら、以下のようなことを思った。

会場はギャラリーや美術館ではなく、空き家や戸外である。環境や空間を考慮したデザインが求められるインスタレーションである。

作品は、ほぼ一回きりの使い切りと考えた方がいい。

一回きりにかける労力と時間を考えると、金銭面ではとても合わないが、今回は予想を超えた多くの人に「無限折りの枯山水」を体験していただけたので、作者が見せたい、というより、作者も見たい世界を展開する場を得て、それを観客と共有できたという別の大きな報酬があった。良しとしよう。

折り紙作品は繊細だ。後半は雨が多くだったので、紙が徐々に膨らんできて型くずれを心配したが、なんとかなった。作品も多くの人々に見られて「見られ疲れ」をしたように感じた。折り紙は、すべてではないが、折り上がったその瞬間が一番美しく、あとは劣化が進むようを感じる。

草月流で長年研鑽を積んでいる友人がいる。生け花の展示は3日～1週間くらいが多いと聞く。いつも一

回きり。その一回きりのためにかけるエネルギーはものすごい。それが普通の世界だ。あやかりたい。

そうそう、美術評論家の布施英利さんと会場近くの山中でばったり会い「布施さんですか?」「はい、布施さんですね?」とお互いに名前だけは知っていた。英利さんはアマゾンで検索すると自分に続いて私が出てくるので気になっていた、とおっしゃった。立ち話程度で終わわたが、「いつか造形について話したいですね」と別れた。

雨ばかりの夏が終わろうとしている。

それでもヒマワリやオイランソウやケイトウなど、夏の花が花壇を彩り、園芸品種の人工の色が緑深い山中に人の営みを刻している。モリオガエルも順調にそだち、ルリボシヤンマも今のところ8匹が羽化して、水分の多い空にとんでいった。

おりがみ 多面市

がらくたいち

Origami Odds and Ends

やまぐち真
Yamaguchi Makoto

第85回 クレマチス／フタつきトレイ

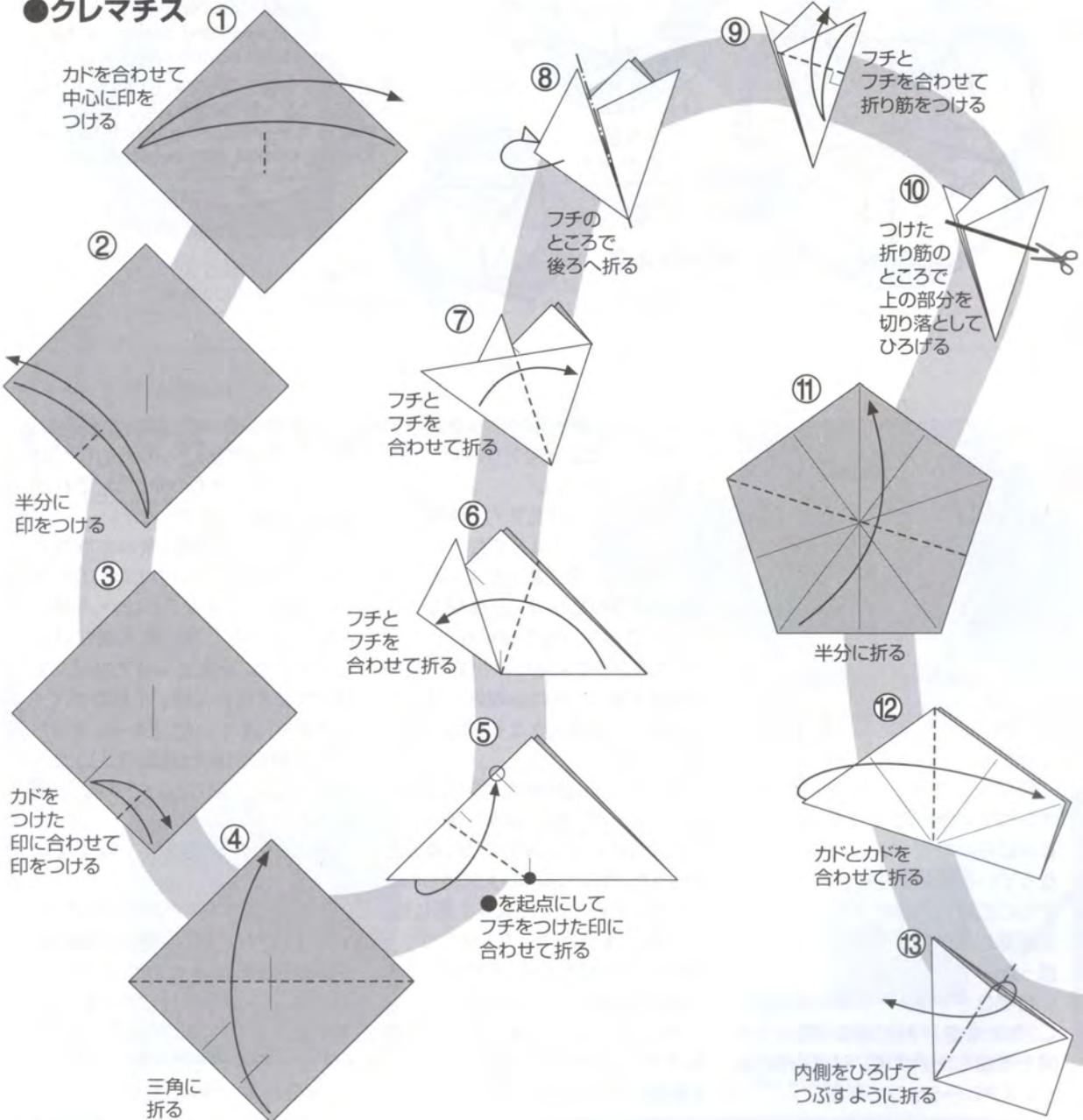
作: やまぐち真 折り図: おりがみはうす

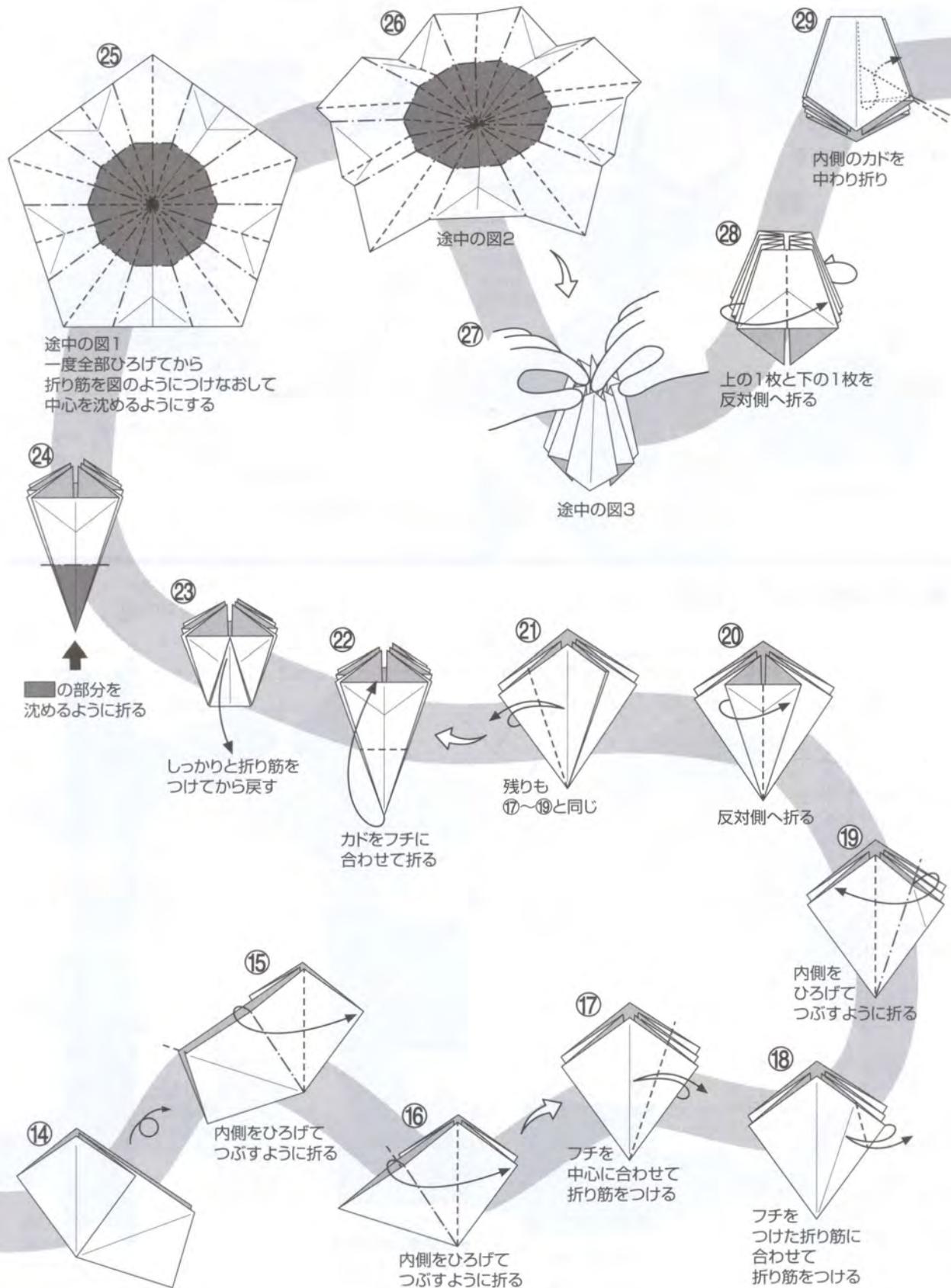
Clematis, A Tray with a Lid: Model by Yamaguchi Makoto,
Diagrams by Origamihouse

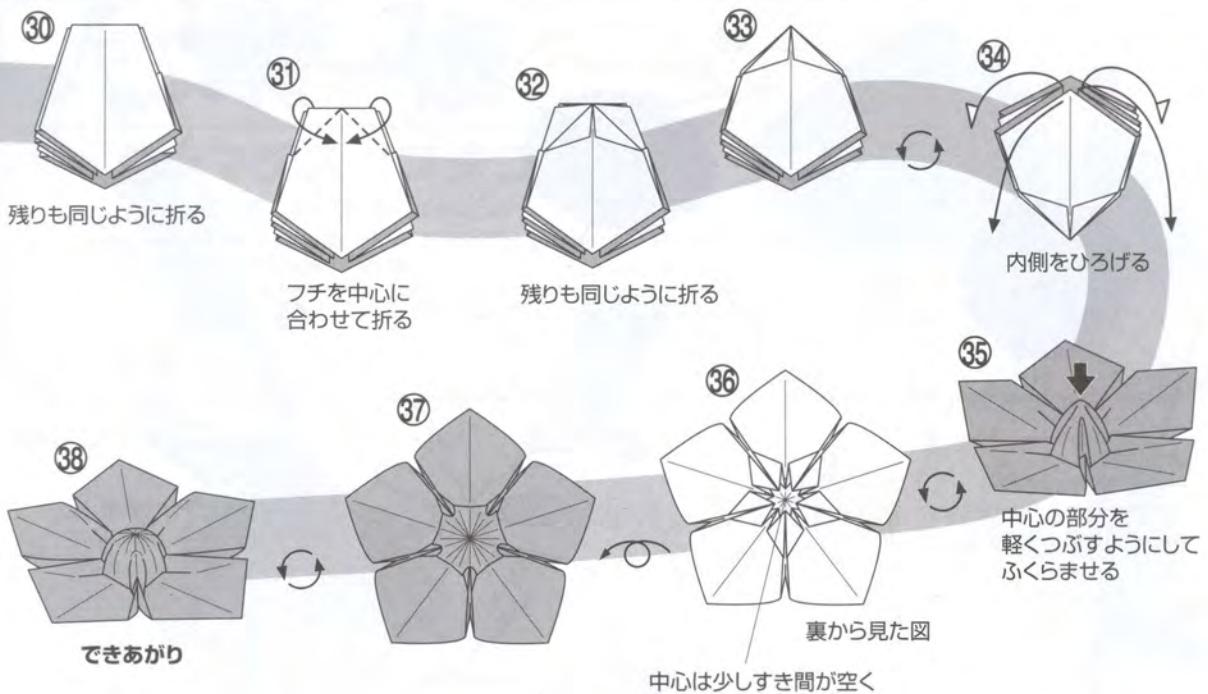
「クレマチス」は、私の「花水木」を5角形で折ったもので、18年ほど前に作図して未発表のままでした。「フタつきトレイ」は、昨年出版した実用折り紙の本で収録しきれなかった作品です。



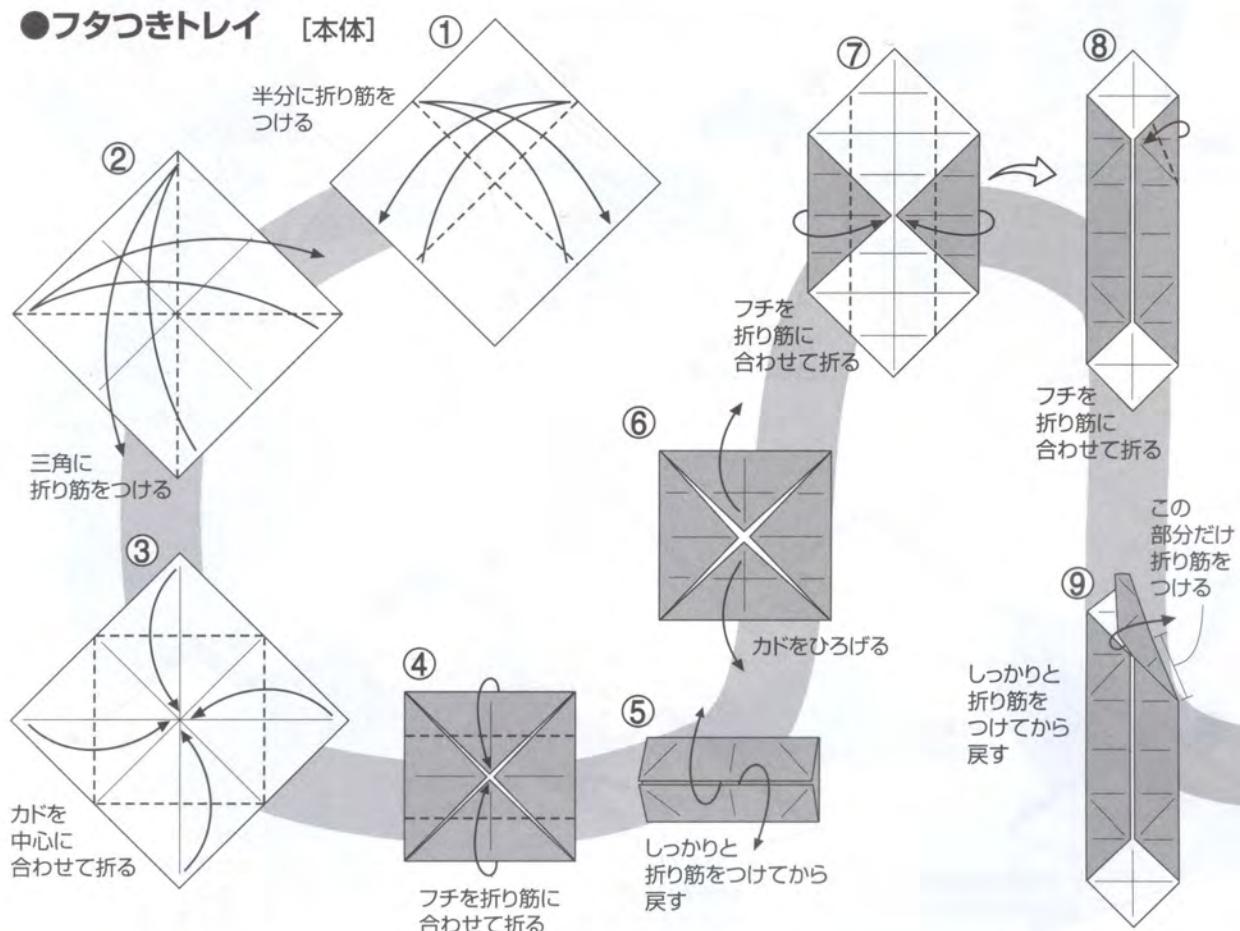
●クレマチス ①



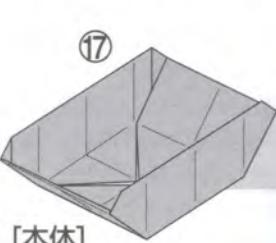
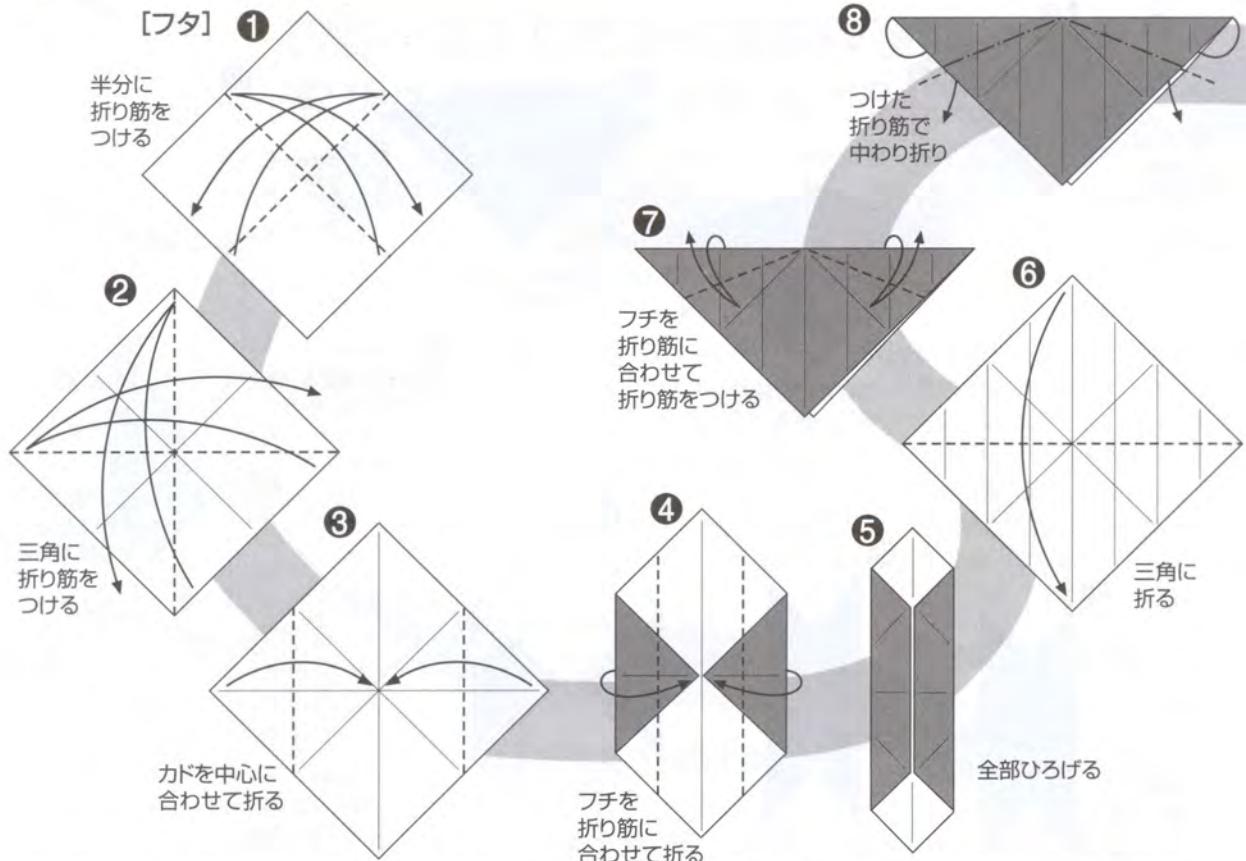




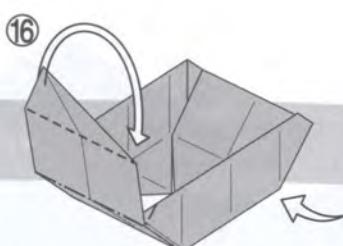
●フタつきトレイ [本体]



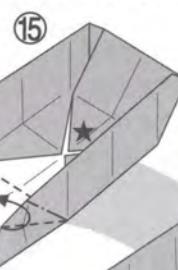
[フタ]



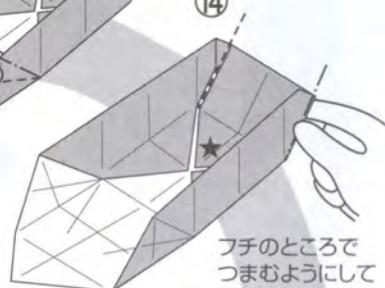
[本体]
できあがり



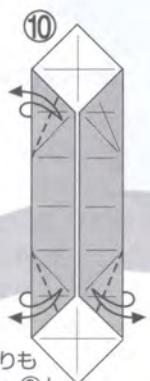
途中の図



反対側も
⑫～⑯と同じ
ように折る



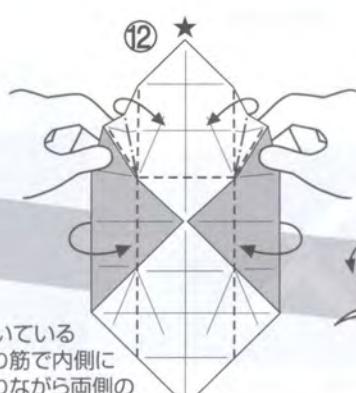
フチのところで
つまむようにして
形を整える



残りも
⑧～⑨と
同じように
折り筋をつける



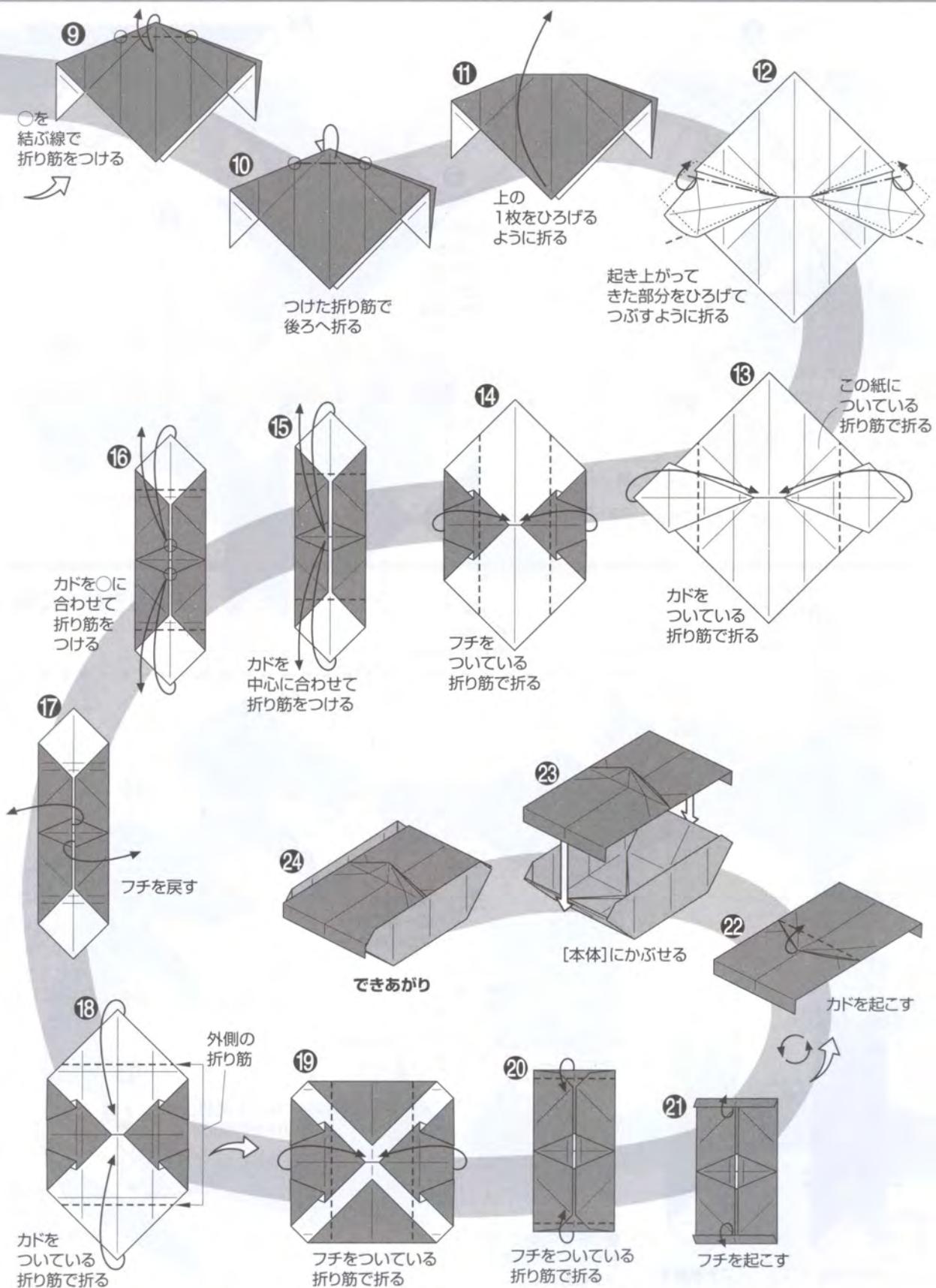
フチを戻す



ついている
折り筋で内側に
折りながら両側の
フチを起こす



ついている折り筋で
カドを内側に折る





吉野一生氏の動物作品創作過程 発想体系を想像(妄想)してみる

Imagining How Yoshino Issei Created His Animal Models

北條高史

Hojo Takashi

■馬とアパトサウルス■

20数年前、筆者が折紙探偵団(折紙学会の前身)に参加して間もない頃。できたてほやほやの「馬」(図1)の折り図を吉野氏からもらったときのこと。

帰宅後すぐに夢中になって折り、しばらく格闘してなんとか完成形にたどり着いた。(24センチ角の折紙用紙で折ったので、そこいら中がボロボロになっていたけれど…。)

本作最大の見どころである「螺旋のような模様が付いたたてがみ」に関して、立体構造としては理解できているつもりだったのだけれど、それでもなお、流れるように折り出される工程が不思議で仕方なかった。それを無理なくこなすための仕込み(事前に折り目を付ける工程)も非常に練り上げられている。折り図が発表される前の段階で、たてがみ部分だけを「にらみ折り」してみたことも何度かあったけれども、きれいにできたことは一度もなかった。ましてや、このような「特徴のありすぎるデザインで、しかも、周囲の構造に大きな影響を及ぼす部品」を、「単独で扱うだけでなく、大きな作品の一部として組み込む」段階には、筆者自身では到達できないだろうと思つたし、現在もできていない。

ところで…ここであらためて見てみると、「馬の工程58」とアパトサウルスの工程35って、各部の長さ・幅とか比率は違うけれども、基本的に同じ構造なのではないか?」と思えてきた(図2)。

(ちなみに、この記事の中で記載している工程番号は、複数の掲載誌・書籍

がある作品の場合には『一生スーパー・コンプレックスおりがみ』収録の折り図に基づいている。吉野氏のアパトサウルスについては、初回発表時(折紙探偵団新聞1号)の題名は「プロントサウルス」で、上記に相当する工程番号は36であり、当時の筆者はこれを見ていた。)

そしてそれ以降も、吉野氏の新作を見るたびに、同様の考えが浮かんでくることがたびたびあった。

■吉野作品の分類案■

吉野作品を「構造・造形方針」でおおまかに分類する場合には、筆者は以下のような体系を使うと把握しやすいと考えている。以下の分類でABCの区分に振り分けた作品が必ずしも適切な場所に入っていないこと(他の区分にも重複している等)もあるだろうし、このほかの分類方法もあるだろうとは思うが、本稿でこれから扱う話題も考慮して今回はこのような区分にしてみた。

A)「伝承基本形の加工」を基本方針とする不切正方形一枚折り作品・少數枚複合作品(鶴・虎・子供のティラノサウルス・オートバイ)

- B) 伝承基本形に依らない不切正方形一枚折り作品(猪・馬・ティラノサウルス・アパトサウルス・トリケラトプス・スピノサウルス・プテラノドン・兜・戦闘機作品)
- C) 多数枚複合作品(ティラノサウルス全身骨格・トリケラトプス全身骨格)

■ここで結論■

結局のところ、この記事で今回言いたいことは図3そのものだ。

上記のB分類に含まれる作品の多くは、(一見共通性が薄い・もしくは共通性がないように見えても、)この図のような発想体系のもとで、同じ造形方針のもとに生み出されたのではないか、という考えである。

この図の元ネタは、生物学にかかわっている人はすでにお気付きかもしれないが、「個体発生は系統発生を繰り返す」という「ヘッケルの反復説」の図。魚・サンショウウオ・カメ・ニワトリ・ブタ・ヒトなどの胚発生過程が並べて描いてあるあの図だ。30年ぐらい前に中学か高校の生物学資料集で見たのだが、今でも載っているのだろうか。元ネタでは個々の図に正確でない

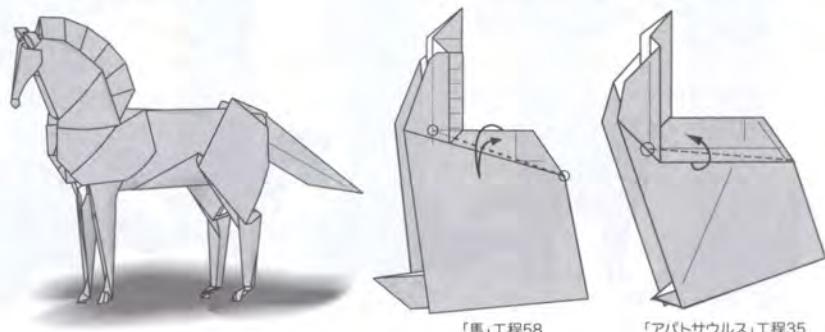


図1

図2



吉野一生氏の動物作品創作過程 発想体系を想像(妄想)してみる

Imagining How Yoshino Issei Created His Animal Models

北條高史

Hojo Takashi

部分も多いし、そのほかにもさまざまな問題要素が含まれている。しかし、生物の実際の胚発生にこのような考え方をあてはめることにはいろいろと問題があるにしても、造形をおこなうにあたっては有り得る発想ではないか。吉野氏が動物作品の創作にあたって、(反復説の図を実際に意識していたかどうかは不明だが、)作品生成の体系をこのように捉えていた可能性はあると思う。

図3の上中下段のうち上のところに並べた図は、「頭部や尾、脚部のためのカドを長く・もしくは幅を持たせて引

き出せるように、正方形用紙の縁を折り返して仕込んだもの」と言えるだろう。それぞれの作品でこの状態の折り幅は異なっているけれども、基本的に同一の発想だ。

中段に並べた図を見てみると、「アバトサウルス」と「馬」のような強い類似性は他の作品には見出しにくいとはいえども、「スピノサウルス」にも明確な繋がりが見える。その他の作品も実際に折ってみれば、この段階の構造が持つ共通イメージを感じ取ってもらえると思う。さらに、「スピノサウルス」「ティラノサウルス」「鮭」で類似し

ている頭部構造(白い下顎の上に、色面が出た状態の上顎部品が被さるデザインとなっている)にも注目してほしい。

「この基本構造・発想を使って、図3の上段段階で縁の折り幅を変化させれば、さまざまな動物を折り出すことができるはず」と吉野氏は考えたのではないか。このような設計方針で図3の上段から中段のように進めてゆく作業・方法論を、筆者は勝手に「吉野式基本形」とか「吉野式デッサン骨格」、「吉野式胚発生」などと呼んでいる。(ちなみに、折紙探偵団新聞40号～

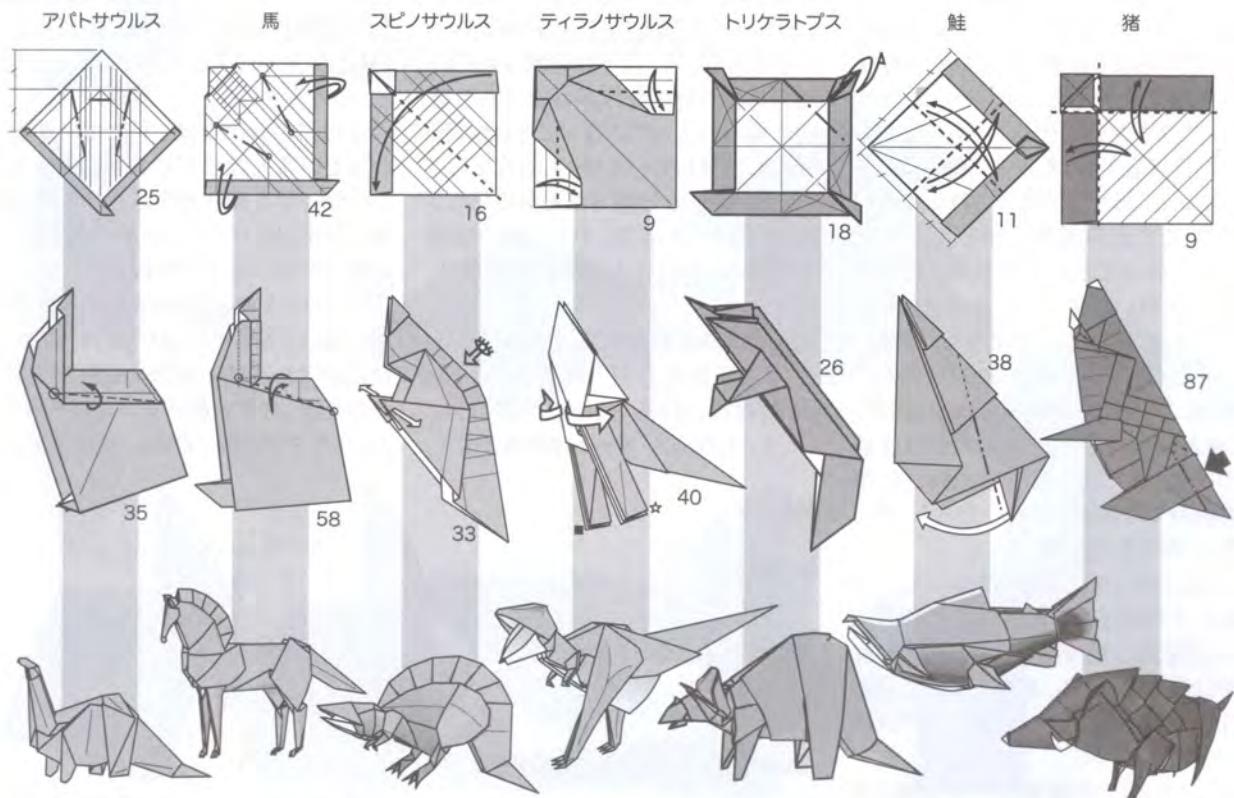


図3(吉野氏の折り図を北條が一部改変)

○北條高史(ほうじょう・たかし)=栃木県生、東京都在住。日本折紙学会評議員。今回の記事作成にあたっては、西川誠司氏・小松英夫氏・山口真氏に相談しながら進めました。この場を借りて御礼申し上げます。



42号に折り図が掲載されている戦闘機作品「F-15イーグル」(原図:吉野一生、トレース:木村良寿)は、生物ではない機械の題材でありながらも、図3掲載作品と同様の制作方針となっていることがわかる。)

■「吉野式基本形」の方向性■

「吉野式基本形」以前・もしくは同時代に存在した動物作品のための創作・発想体系としては、おおまかに以下の4つの方向性と、その応用や組み合わせがあったと思える(これについても、厳密な区分は人によって異なるとは思うが、筆者が思うところの区分を示す)。

1. 伝承の基本形や、それを1枚に複数折り込んだ基本構造からカドを振り分けて、動物の各部・部品に割り当ててゆく
2. 前川淳氏の『ビバ!おりがみ』収録作品のように、22.5度などを基本単位とした角度の折紙原子を用紙に配置してゆく
3. 川村晟氏の『おりがみ動物アルバム』収録作品、ニール・ライアス氏の作品のように、ボックスブリーツを基本構造とする
4. 目黒俊幸氏の折紙分子論やプログラム「おりお」を用いた設計、ロバート・ラング氏の動物・昆虫作品のように、完成形の各部品に必要な長さを考慮して用紙周囲・内部にカドを配置し、内部を折りたたむための折り線を発生させる

その上で、2番目以降の方法によって、「完成形のバランス・シルエットを或る程度自由に調整できる技術」を使える人が増えた。これらの方ではそ

れぞれ、「ユニバーサル度合」というか「なんでもつくれると思える万能感」のイメージ、そしてそれを達成するための模索過程の手間が、異なる角度・方向性・段階で発生する。

吉野式基本形では、「図3の上段の工程段階で紙の縁を折る分量を変化させながら、最終形に現れるカドの長さ・部品デザインのバランスが最適になるところを模索する」ことが必要になり、この部分で試行錯誤が繰り返される。

そして、このような作業を経て登場してくる「図3の上段・中段の構造」を見ると、すでに言及した他の動物創作方法論と比較して、より「生物的」なイメージを当てはめやすいと思える。「途中の特定段階までの形状が或る程度類似していて、全工程を通して最終形に向かいながら少しづつ連続的に分化し、特徴を取得してゆく」という印象が比較的強い。図3のように示すことが「しっくり来る」のだ。

それに対して上記区分2~4では、制作の最初期(カドの位置を明確に認識するステップ)に特徴取得過程が多く割り付けられている印象を受ける。図3と同様に途中形を並べて、完成までの過程の類似性を比較することも同じようにできるはずだが、吉野式基本形の場合にくらべて、「最初期の段階で、運命の違いを大きく方向付けているように見える」度合が強いと思える。

■吉野作品の「違和感」■

「吉野式基本形」の作法で到達する完成形の表面には「変則的で複雑なリズム感」のある見慣れない角度構成

で、折り目や用紙の縁が出現することになる。

「そうでありながらも」と言うべきか、「そうであるからこそ」なのか、複数の作品を通して不思議な統一感が備わったデザインに到達していると思える。図3の中段に掲載した工程図の段階でも、「題材の違いを越えた統一感」があふれ出している。

吉野氏が亡くなってから20年以上経過した現在でも、折り図の通りに折り進めてゆくことでこのような「調和の取れた強い違和感」を纏った完成形に至る作品は、あまり登場していないのではないかと思う。

また一方で、以下のような話を以前聞いたことがある。

「馬」では工程2のところで「だいたい1/3のところに折る」という指示がある。この折り分量は「ぴったり1/3」にすれば最善というわけではなく、吉野氏自身が折るときには微妙な違いがあった、というのだ。この話は吉野氏が亡くなつてからしばらくして、山口真氏・西川誠司氏・木村良寿氏と集まつた際に聞いたことだと思う。

この折り分量のわずかな違いは、その後の工程を進めるにあたって全体的に影響を及ぼしてくる。折り図の通りに折るだけでは到達できない、微妙ではあるが明確な違いのある完成形を得るために、厳密には表現しにくい折り分量。用紙の大きさ・厚さによっても変動する要素なのだろう。

自身の制作に於いてはこのような繊細な技術を臨機応変に使いながらも、折り図では多くの人が追体験できるような理解しやすさ・作業難易度を強く意識し続ける人であった。

折紙図書館の本棚から

From the Bookshelves of the JOAS Library

マルシオ・ノグチ Marcio Noguchi

この連載では、折紙学会図書館に所蔵されている資料の中から、興味深いものを選んでご紹介しています。折紙図書館の蔵書は、折紙探偵団ホームページから検索できます。詳しくは、<http://origami.gr.jp/Library/>にアクセスしてください。

58冊目 『The Paper』OrigamiUSA機関誌の過去、現在、将来

The Past, Present and Future of the OrigamiUSA Magazine "The Paper"

日本折紙学会図書館には幅広い折り紙に関する書籍および定期刊行物が収集・所蔵されています。資料は貴重な歴史的な意味も持っています。「折紙図書館の本棚から」の連載では有名な折り紙書籍がたくさん紹介されてきましたけれど、今回はアメリカの団体OrigamiUSAの定期刊行物を紹介したいと思います。

折り紙団体機関誌

日本折紙学会の中心活動の1つとして購読者および会員のために1期6冊のマガジンを発行しています。内容は折り図、研究発表、インタビュー、エッセイ、折り紙コンベンションなどの情報と報告、折り紙を楽しみつくす専門誌です。世界で最も品質が高い折り紙団体機関誌とされています。今、あなたの手にしているのがその1冊です。

日本折紙学会と同じように海外の折り紙団体も定期的にマガジンを発行しています。内容は多少変わりますけれど主に各国の折り紙作家、作品、活動が紹介されています。

所蔵海外団体機関誌

日本折紙学会の図書館^[1]には国内と海外の折り紙団体の機関誌が資料

として所蔵されています。昔に発行された機関誌もありますので歴史的大変貴重な資料になります。

以下、海外団体機関誌の所蔵リスト^[2]です。

- ・アメリカ: The Paper (旧The Newsletter)
- ・イギリス: British Origami
- ・オランダ: Orison
- ・スペイン: Pajarita
- ・イタリア: Quadrato Magico
- ・ドイツ: Der Falter

ちなみに国内団体の日本折紙協会の『月刊おりがみ』も揃っています。

OrigamiUSAの定期刊行物

今回はアメリカの折り紙団体OrigamiUSAの機関誌『The Paper』を紹介します。1980年に第1号が発行されて以来、旧『OrigamiUSA Newsletter』は52号(1995年秋)か

ら『The Paper』として新しい名前で生まれ変わりました。実際には遡って、『Newsletter』の前に、1958年から機関誌『Origamian』が発行されていました。そして、将来に向けて『The Paper』が継続されるのと同時に、時代に合わせて2010年から電子版マガジンの『The Fold』が始まりました。なので、今現在はOrigamiUSAの会員は2種類の定期刊行物を楽しめます。印刷版の機関誌『The Paper』^[3]とPDF形式電子書籍版の『The Fold』^[4]。図書館には1985年からのNewsletterを所蔵しています。

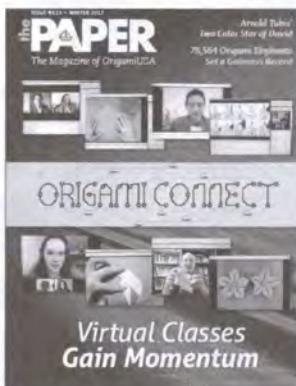
『The Paper』選集概要

日本折紙学会図書館に所蔵されている、長年にわたる『Newsletter』と『The Paper』の内容概要を紹介します。

18号(1985年5月):

名誉会員のお知らせ: Alfred Bestall, Neal Elias, Natalie Epstein, Mick Guy, Toshie Takahama, Akira Yoshizawa

39号(1991年春/夏):



1958 - 1986:

1980 - 1995:

1995 ~:

2010 ~:

写真1 OrigamiUSAの機関誌のロゴデザイン



写真2 The Paper 123号(2017年) 写真3 FOCA Newsletter 42号(1992年)

○マルシオ・ノグチ(Marcio Noguchi)
= ブラジルのサンパウロ出身、サンパウロ大学電気工学卒業。1987年シティバンク銀行入社、1991年シティバンク東京支店へ転勤となり日本に移住。1993年、クレディ・スイス証券東京支店に転職し、2000年にニューヨーク支店へ異動。2016年にコンサルティングの仕事のため、東京都のEYに入社。現在日本在住。OrigamiUSAの評議員代表であり、ボランティアとして活躍している。



1991年コンベンション報告。参加者数600人／折り図を描くソフトウェアの評価:MacDraw、FreeHand 3.0その他(寄稿:Robert Lang、V'Ann Cornelius)

43号(1993年冬/春):

川畑文昭氏カナダ訪問、バナナを食べて創作のために脳の想像力を保つ秘密を明らかにする／Robert Lang氏来日、鳩時計の公表、初めて山口真氏に会う

48号(1994年夏):

団体の名前をFriends of Origami Center of America(FOCA)からOrigamiUSAに変える／1994年OrigamiUSAコンベンション報告、山口真氏、前川淳氏、川崎敏和氏、布施知子氏の初参加

52号(1995年秋):

OrigamiUSAの機関誌の名前が『Newsletter』から『The Paper』に変わる／1995年OrigamiUSAコンベンション報告

74号(2001年2号):

カリフォルニア州で第3回OSME(Origami, Science, Math and

Education)

88号(2004年5号):

『The Paper』の表紙がカラーになる／折り紙ホリデーツリーが大きくなる(寄稿:June Sakamoto)

105号(2010年秋):

『The Fold』OrigamiUSA電子書籍の第1号／2010年コンベンション報告、巨大折り紙イベント

117号(2014年秋):

『The Paper』がフルカラーになる／OrigamiUSA中継

図書館へ行こう

毎月たくさんの新しい本が出版され、良い折り紙の本も次々と出ています。そういった新しい本も良いですが、図書館にも良い本がいっぱいあります。図書館の本を読むようにすることもいいことです。古くても良い本はいっぱいあります。困ったときに助けになってくれる本もあります。将来の役に立ったり、基盤となる本もあるかもしれません。面白い、ワクワクする、感動する、悲しくなる本もあります。ぜひ図書館にも良い本があると頭の片

隅に入れておくと、役立つかもしれません。

今のご時世、iPadやKindle、スマホなどが普及して電子版の資料が流行になって実物の本から遠ざかりつつあります。けれど、折紙図書館で実物の本や機関誌を読む楽しみを改めて感じました。また、機関誌で折り紙作品、活動やイベントの報告を読みながら、どんな人が何をやっていたか思い出して、時代の流れを実感できます。そして、写真を見ながら、この人は若かった、こういうこともしていたと感動もできます。今後、日本折紙学会図書館を有効的に利用して、新たな発見をしたいと思います。

参考ウェブサイト

- [1] 日本折紙学会図書館:<http://www.origami.gr.jp/Library/>
- [2] 海外団体機関誌所蔵リスト(不完全):<http://www.origami.gr.jp/Library/ForeignMagazineList.html>
- [3] OrigamiUSA The Paper:<https://origamiusa.org/thepaper>
- [4] OrigamiUSA The Fold:<https://origamiusa.org/thefold>

写真提供:OrigamiUSA



写真4『Newsletter』48号(1994年)より

OrigamiUSAコンベンション。山口真氏、布施知子氏、Tony Cheng氏



写真5『Newsletter』48号(1994年)よりOrigamiUSAコンベンションの海外参加者



写真6『Newsletter』41号より吉澤章氏

お詫び:前号の本ページにおいて、「東洋大学海洋科学博物館」という記載がありました。正しくは「東海大学海洋博物館」でした。訂正してお詫び申し上げます(編)。

ぼくらは 折紙探偵団

Here We Are, THE ORRIGAMI TANTEIDAN



第31回 紛らわしい(?)折り紙用語

Polysemy in Origami Terms

折り紙の世界には多くの「専門用語」があります。〈蛇腹〉や〈コンプレックス〉のような、日常で使われるときとは別の意味を持つ用語、〈半開折り〉のように一般の人にも何となく意味が推測できそうな用語、〈一値分子〉や〈4鶴〉などの初めて接したら「?」となるであろう用語など、さまざまです。

さて、そんな折り紙用語を見渡してみたときに、同じ言葉なのに異なる事柄を指して使われるものがあるのをご存知ですか。今回取り上げてみるのは、そんな“紛らわしい”折り紙用語たちです。

* * *

■らせん折り

〈らせん折り〉と聞いてどんな折り方を想像されるでしょうか？ 図1-Aは川崎敏和さんが考案し「巻貝」等の作品で使用された折り技法です（命名は笠原邦彦さん）。しかし、図1-Bのようなものもまた〈らせん折り〉と呼んだりします。もし〈らせん折り〉を使ったカタツムリを創作したいと言われたとき、前情報が無いと「はて、どちらの技法のことだろう？」と思ってしまうかもしれません。

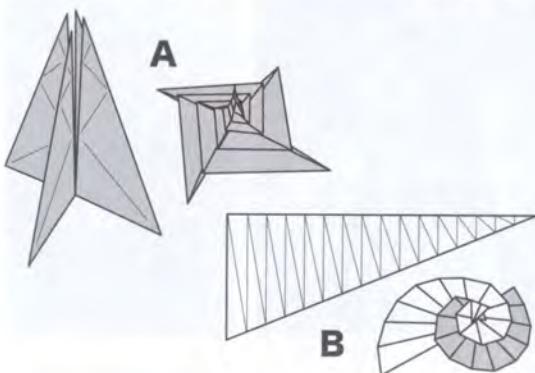


図1

この問題に対して、布施知子さんは著書『らせんを折ろう』で、図1-Aを〈川崎式らせん折り〉と呼ぶことで特別視していました。

■仕込み折り

2つの〈仕込み折り〉は、その“仕込む内容”が違っています。

まずは「細部の表現や、後々で使う分の領域を最初の段階で組み込んでおく創作手法」のことです。図2にその例を示しました。

そして、複雑な作品の折り図でしば

★トリビア★ 「外割り折り」という折り紙用語が 提唱されていた

しば見られる「後の工程で必要となる折り筋を冒頭でまとめてつけておく工程」もまた〈仕込み折り〉と呼ばれることがあります。ボックスプリーツ（蛇腹）作品で、格子の折り筋をつけるときなどにも使われたりします。

■仕上げ

多くの折り紙作品は、展開図で表されるような幾何学的な折り線でまず畳

小松英夫
Komatsu Hideo

み、そしてできた〈基本形〉を“造形の素材”的に扱い、細かく折り込んでいくことで作られます。この基本形以降の折り込みの工程のことを〈仕上げ〉と呼びます。

もう1つは、折り紙用語というよりは一般用語としての意味に沿うものかもしれません。すなわち、作品を折り終えた後に糊付けをしたり、内側に針金を入れたりして、1つの作品としてきちんと完成させることです。『端正な折り紙』では、「仕上げのりづけ」としてこちらの意味が使われているコラムが掲載されています（208ページ）。

■背割れと腹割れ

この用語は、どちらの意味も、主に生き物を折った作品に対して使われるものです。

図3は、動物に必要な6つのカドを折り出した形の一例です。ここから〈仕上げ〉をして動物らしくしてゆくわけですが、1つめの意味は“体の上下に対しての、紙のフチの位置”に注目した概念です。図4-Aのように仕上げた作品の背中の部分を見ると、紙のフチが揃うように集まっている、割れ目のよう

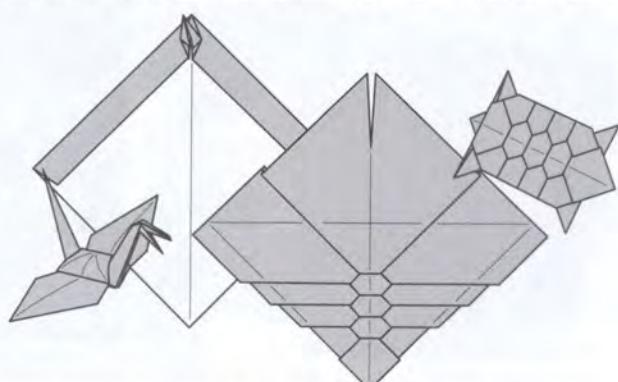


図2:〈仕込み折り〉の例。口を開けた鶴と甲羅模様のある亀

○小松英夫(こまつ・ひでお)=1977年生まれ。日本折紙学会評議員。執筆にあたり西川誠司氏にいろいろとサジェストionを頂きました。ところで『小松英夫作品集』では、precreasingの仕込み折りのことを〈下折り〉と言い換えてみたことがありますがあまり流行らなかつたようです……。



になっています。このような紙の使い方が「背割れ」と呼ばれます。

もう1つは、「胴体の断面のようす」に注目するものです。図4-Bのように、足の生える向きをAとは上下逆にして仕上げたものを見ると、背中がぱっくりと開いたようになっていて、これまた〈背割れ〉というわけです。ところがこれは、1つめの意味では、おなか側に“割れ”(紙のフチ)が来ていますので、逆に〈腹割れ〉ということになってしまいます。

図5に、それぞれの組み合わせで取り得る4パターンを示しました。四角の吹き出しとなっているのが“紙のフチの位置に注目したもの”、角丸の吹き出しが“胴体の断面のようすに注目したもの”です。うち半分の2パターンで、どちらも同じ名称になってしまふことが分かります。

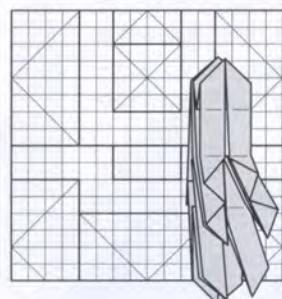


図3:16等分ボックスプリーツによる簡単な動物の基本形

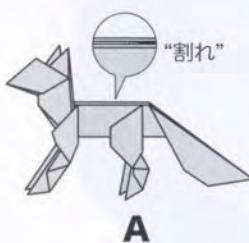


図4

これらの2つの意味の〈背割れ(腹割れ)〉は、前川淳さんの『本格折り紙』でも、「背割れ1・背割れ2」と区別して紹介されています(88ページ)。

* * *

以上、4つの用語を取り上げました。これらの紛らわしさを解消しようとするとならば、どちらか(あるいは両方)の意味するところ(概念)を別の言葉で言い換える、ということを考えられるかと思います。

もっとも、言い換える新用語が定着していない現状を見るに、そもそも“文脈”で十分判断できるものと考えられているのかもしれません。取り上げた用語はミニアックなものが多いですし、書く／話す人も読む／聞く人も文脈に敏感であるなどして的確に判断してしまうこと、ということはありそうです。あるいは(これは筆者もしばしば行ってしまうことです)例えば〈仕込み折り〉を〈precreasing〉と〈grafting〉のように英語圏の用語で表現することで、紛らわしい用語を用いないで話してしまうこともあるでしょう。

ここで改めて「新しい折り紙用語がどのように定着するか」ということを考えると、ある人が定義とともに提唱して受け入れられ

れるパターン、ローカルな集まりでなく生まれた表現がいつの間にか広まるパターン等、いろいろなケースがあると思います。著名な作家やメディアに使用されることで、愛好家に一気に認知される、ということを考えられます。

しかし、その過程はそう単純ではないかもしれません。本誌112号の「折紙図書館の本棚から」でも紹介したエピソードですが、故・内山興正さんが論理的な整合性を考慮して〈中割り折り〉と〈外割り折り〉の対となるように命名した折り技法の用語は、時間の波に洗われて、〈外割り折り〉の方は、同氏が「かぶせるように両側で段折り」の技法として定義した〈かぶせ折り〉の語に取って代わられてしまった、という経緯があります。想像するに、多くの愛好家にとって〈外割り折り〉よりも〈かぶせ折り〉の方が、より直感的で使いやすく感じられたためでしょう。

ある折り紙用語が使用される背景は、場所や時代によって変わりゆくものでもあります。その現在、そして歴史的な変遷もまた、折り紙の文化を担う興味深い世界であると思います。

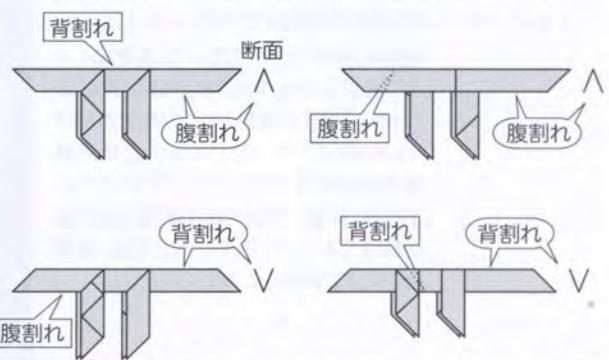


図5:両方が〈背割れ〉となる右下のケースは、実際の作品としては無理があるものです(異なる構造でもう少し現実的なかたちもありますが略します)

今号の折り図・展開図掲載作品より

解説：北條高史（P.20-21）

Models Based on Diagrams and Crease Patterns of This Issue Comments: Hojyo Takashi (P.20-21)

「ポーラス」作：川村みゆき（P.4）

Porous: Kawamura Miyuki (P.4)

■部品を組み合わせることによって生じる曲面が、隣同士で押し合いへし合いしながらたどりついたバランス。サンゴのような群生生物が遺した抜け殻にも見えますが、まだ住人が内側に隠れているかもしれない、みずみずしい雰囲気も同時に併せ持っているようです。



「クレマチス」「フタつきトレイ」

作：やまぐち真（P.8）

Clematis, A Tray with a Lid:
Yamaguchi Makoto (P.8)

■トレイの蓋の真ん中にある出っ張りは大きすぎず小さすぎず、過度な主張をしていないけれどもしっかりとした存在感が際立っています。模様や質感にこだわって紙を選び、クレマチスと一緒にディスプレイすれば上品な空間が出現します。

「恐竜の頭骨」作：菊地柾斗（P.38）

A Skull of a Dinosaur:

Kikuchi Masato (P.38)

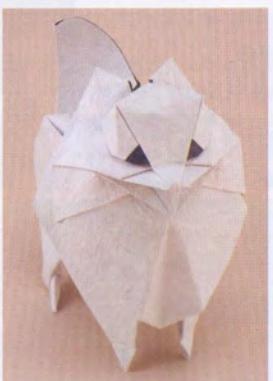
■用紙両面の色を活用して、絵を描くように表現された作品。本作のような「化石」や、「壁画」「紋章」などの題材と相性がいい技法です。きっちりとした角度構成の展開図をたたんだところからの仕上げは、非常に工夫のし甲斐がある作業。初回はうまくいかなくて当たり前、納得がいくまで模索してみてください。



「バレリーナ」作：北西一貴(P.39)

Ballerina: Kitanishi Kazuki (P.39)

■指先、手首、足首など、あらゆる関節部分に張り巡らされた緊張感。作者の繊細な造形技術と、それを十分に受け止めて成立させるための部品配置構造。これら双方の練り上げがあって初めて実現する完成形は、一瞬近寄り難いと思えてしまうほどの鋭い魅力を放っています。



「ポメラニアン」作：勝田恭平(P.26)

Pomeranian: Katsuta Kyohei (P.26)

■前後左右上下、どこから見ても安心のふわふわボリューム感。額や胸部、臀部の立体的表現が個々に突き詰められている上で、作品全体として適切なリズム感を持った統合がなされています。

第23回折紙探偵団コンベンションより(P.41)

From the 23rd Origami Tanteidan Convention (P.41)

年々参加者数が増え、今年は400人を超える申し込みがあった。諸事情により東大農学部の施設を借りての開催でやや手狭ではあったが、盛況のうちに幕を閉じた。

講演会



▲12日(土)の午前の特別講演。小説の舞台のモデルとなった山口都氏の和紙店「ますたけ」を紹介する瀬名秀明氏。講演は大好評であった

講習作品



講習風景



作品展示



コンテスト

第11回目となった「JOAS創作折り紙コンテスト」。特別テーマ部門「重量感」には10作品、干支部門「いぬ」には9作品、おりがみはうす賞には8作品の応募[※]があった。
※「おりがみはうす賞」は該当作品なし



Nozaki Tsubasa

「ツノガエル」野崎 翼



Takahashi Yukinori



Tsuruta Yoshimasa

JOAS賞 干支部門「いぬ」：「豆助」鶴田芳理



Kobayashi Yuta

「シン・パンダ」小林勇太



Sekine Takeshi

「ぐうたらバグ」関根 武



Kobayashi Hiroaki

「ブサかわDogs」小林弘明

ICOA展示

今年は作品を大幅に刷新しての展示となった。また今年は、全国4箇所での展示で人気投票を行い、年間で一番人気を獲得した作品にはおりがみはうすから賞金が贈られる、コンテスト形式も導入された。



暫定
1位

Imai Yudai



Yamamoto Taiga



Nozaki Tsubasa

▲今年は展示の什器を運営側で用意。アクリル板を展示台にし、展開図を貼っている



Hashimoto Haruka



Komura Yuki



Nagayama Kaito



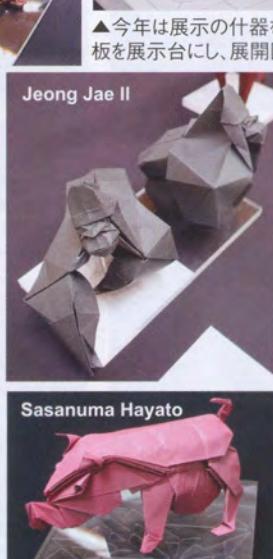
Jeong Jae II



Yuki Shingo



Kang Han UI



Sasanuma Hayato

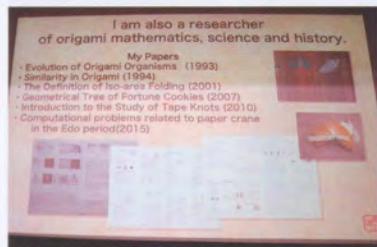


Kikuchi Masato

■ 第8回韓国折り紙コンベンションより (P.41)

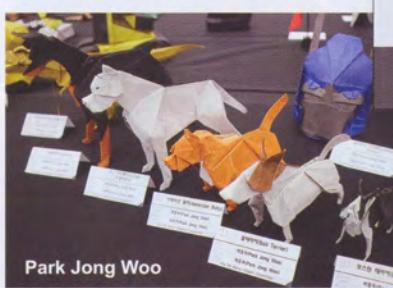
From the 8th Korea Origami Convention (P.41)

会場が変わり、収容人数も増えた韓国コンベンション。今年は定員200人を上回る申し込みがあったという。若手もどんどん育っていて、今後が楽しみだ。



▲今年のゲストであるケイド・チャン氏と前川 淳氏の講演

▲韓国でも巨大折り紙の制作が定着している!?



コンベンション折り図集とは別に、若手の作品を集めて発行される『Origami Pro』は今年で3冊目▼

北アルプス国際芸術祭より(P.7)

From Japan Alps Art Festival 2017 (P.7)

■2017年6月4日から7月30日まで開催されたアートの祭典は、長野県大町市という広いスペースの中に展示され、自然を利用した作品が多かった。その中で、改造した古い店舗の中に展示された布施知子氏の「無限折りによる枯山水」は、多くの来場者に感動を与えていた。ライトを落とした室内で、作品は幻想的なシルエットを映し出し、見る人を巣かな気持ちはさせた。布施氏でなければできない作品展示であったと言えよう。(や)



OrigamiATC研究会より(P.42)

To the Participants of the OrigamiATC Workshop (P.42)

■ATCとは、アーティスト・トレーディング・カードの略。2.5×3.5インチ(64×89mm)のカードに好きなように表現して、交換するというもの。OrigamiATC研究会は、JOASホールで2ヶ月に1回程度開いている、折り紙を使ったATC愛好家の集まりです。8月12日のコンベンション内で開かれた交換会は「自由課題」で、様々なカードが集まりました。郵送参加18名、リアル参加19名で合わせて37名でした。次回は10月15日(日)、郵送参加のカードは12日(木)必着でお送りください。テーマは「○○の秋」です。思い浮かぶ「秋」を表現してください。作品規定と郵送参加方法は右枠内を、直接の参加はP.42「JOASホール今後の予定」をご覧いただき、お申し込みください。

折紙探偵団コンベンションでの交換会と展示

今回集まったカードは、「折紙探偵団コンベンション」の作品展示会場内に飾らせていただきました。交換会にも沢山お集まりいただきありがとうございました。



▼8月の交換会に集まったカードから(敬称略)



「色えんぴつ」
藤原香月・作／使用作品:
えんぴつ=榎本宣吉、ねこの
箸置き=宮本真理子・作



「朝顔の鉢植え」
高知千鶴子・作／使用
作品:アサガオ=川手章子・
作、植木鉢=青柳祥子・作

折紙探偵団東京友の会例会より

From the Regular Meeting of
Origami Tanteidan Tokyo Group



Kasumi Seishi



Hagiwara Gen

次回OrigamiATC交換会:2017年10月15日(日)の郵送参加方法(10月12日(木)必着)

◆作品規定

- ・2.5×3.5インチ(64×89mm)で作成する。
- ・折り紙の要素を1つ以上入れる。
- ・定形郵送するため、厚みは8mm以下にする。
- ・テーマ:○○の秋
- ・裏面には、A.作品の題名と、B.作者名(ハンドル可)、C.「使った折り紙作品の名前」、「創作者名」又は「参考文献名とその著者名」を記入のこと。できれば、作成日や通し番号、コンセプトも書くとよい。

◆応募方法

- ・OrigamiATCを3枚(1口分・上限3口)を作り、宛名(名前に「様」も)を記入して82円切手を貼った返信用封筒を同封し、おりがみはうすへ送付する。
- ・返信用封筒(1口ごとに1枚)は、「長形3号(120×235mm)」を使うこと。

▲この黒枠がカードサイズ

Origami Artist Trading Card	
Title:	雨の音
Theme:	音楽
Name:	hanako
HP, ブログ:	http://ameblo.jp/hanako-origami/
作品について	折り紙の作者名・作品名を記入 HPのURL(個人用ホームページを除く)
力エル	(山口 真一作)
降りしきる雪の音を力エルが聞き入っている といふイメージです	2/12
2016年8月xx日	

▲裏面表記の例

※長方形以外のカードを作る場合は、64×89mmにカドが内接するように作ること。

韓国コンベンションでの交換会



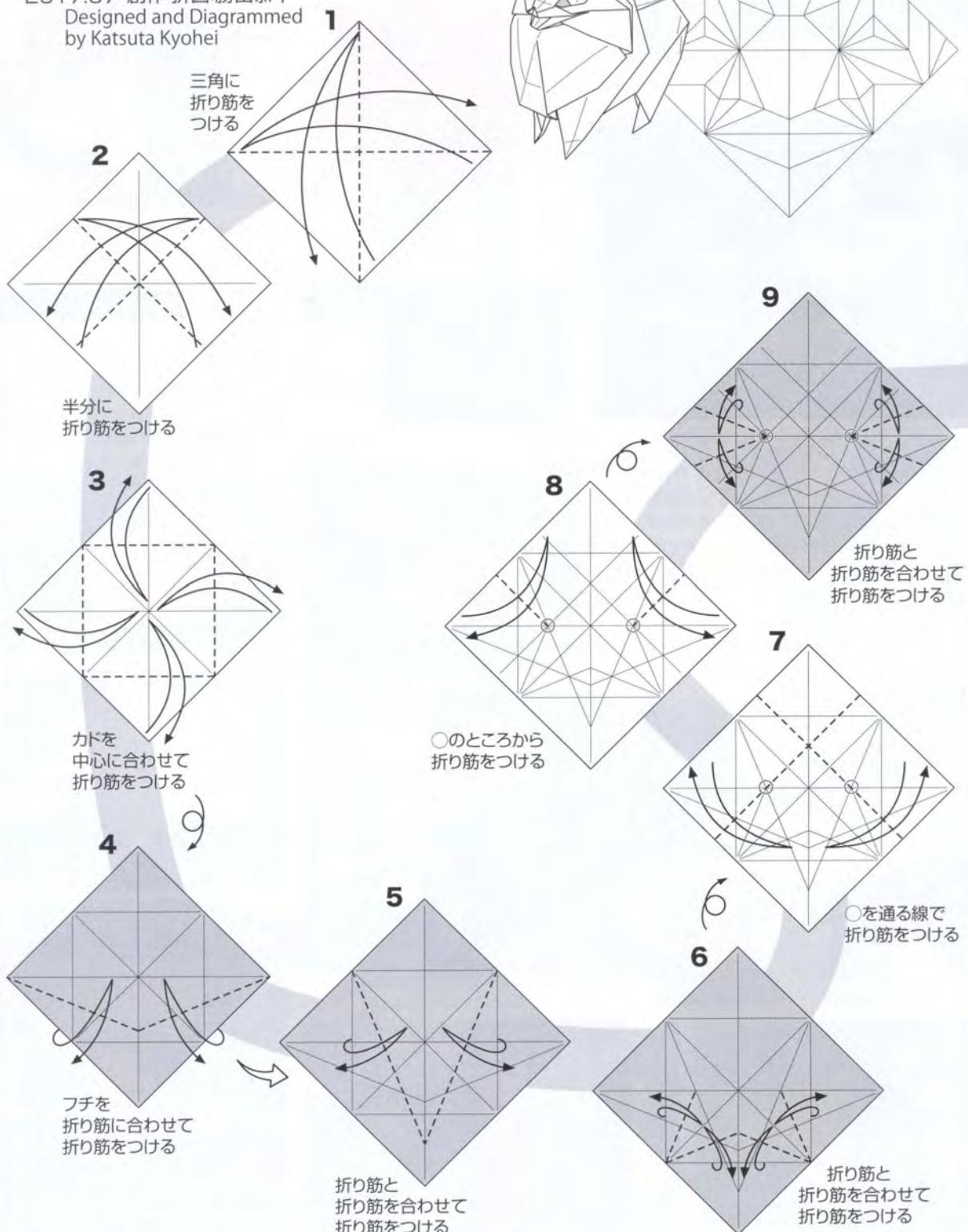
▲韓国の交換会で集まったATC

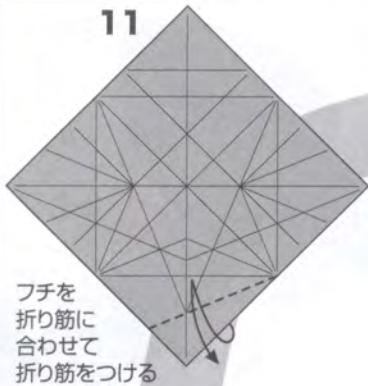
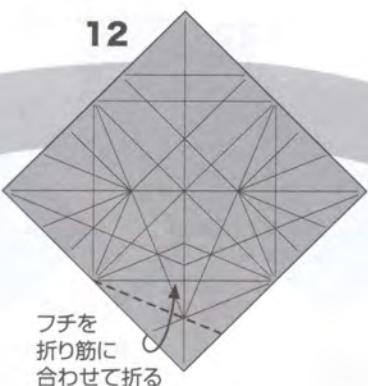
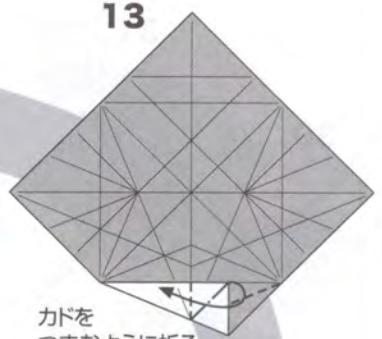
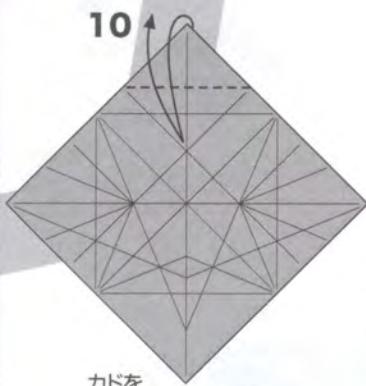
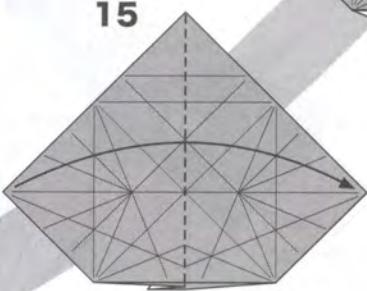
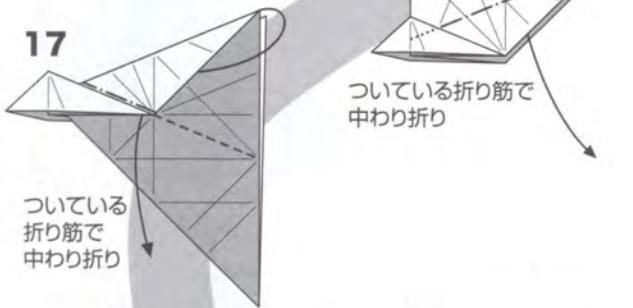
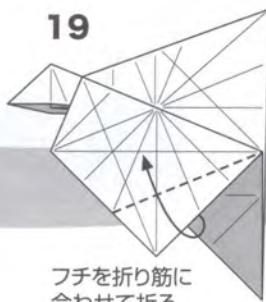
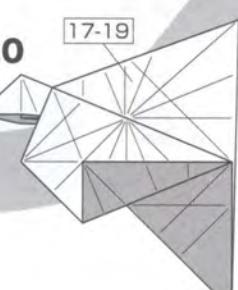
韓国では、皆と1枚ずつ交換した後、自分のカードについて紹介する時間も設けられた

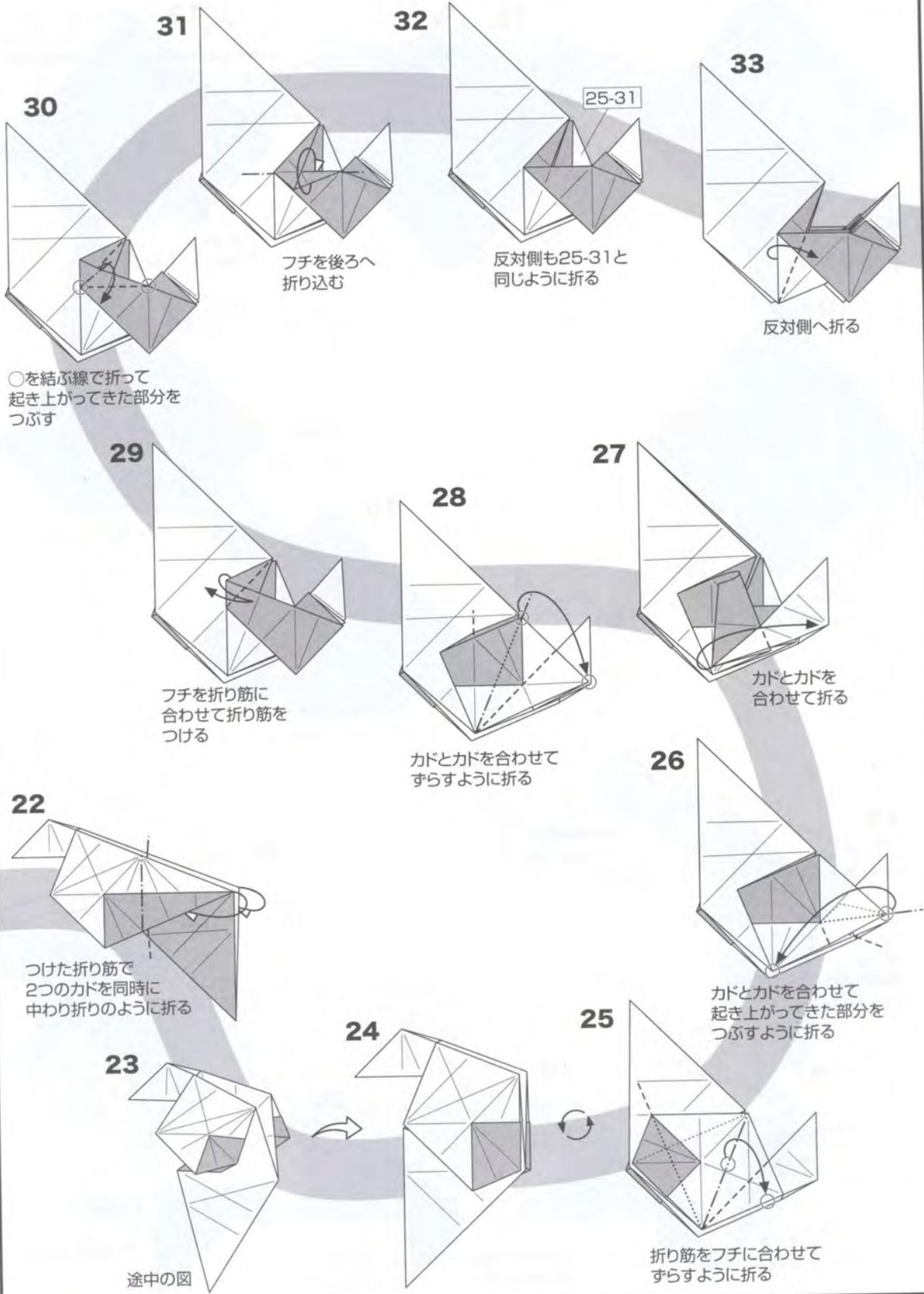
ポメラニアン

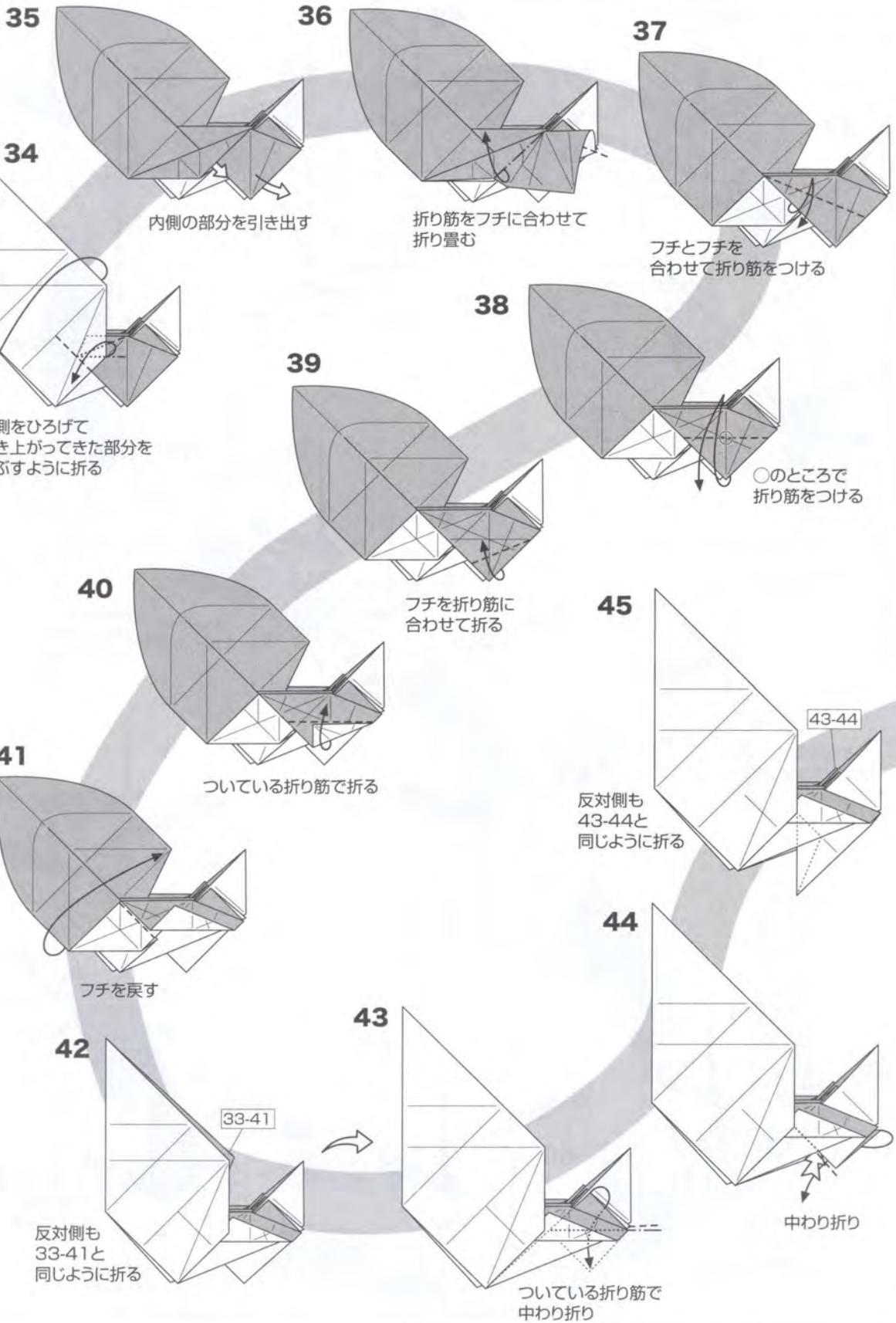
Pomeranian

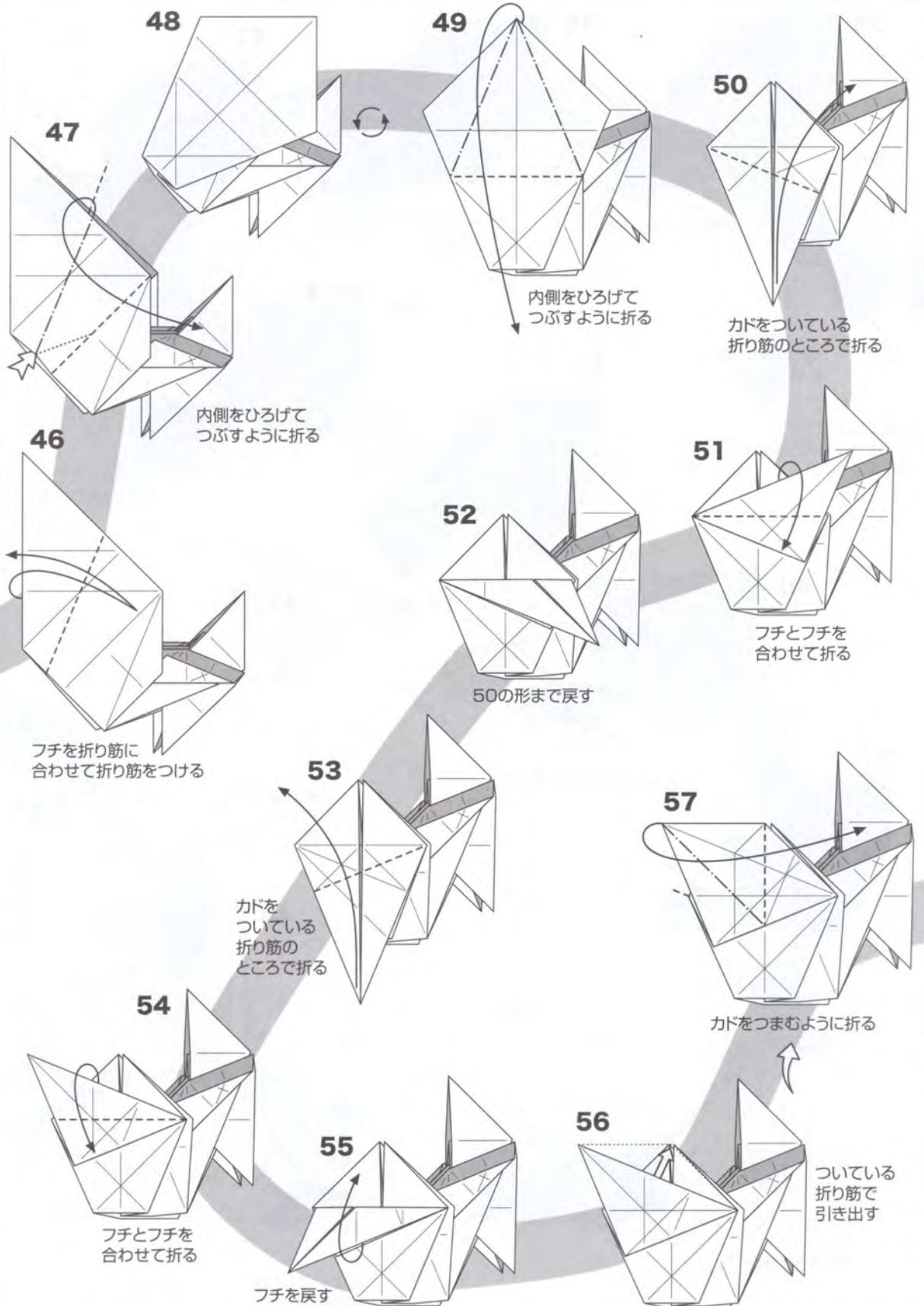
2017.07 創作・折図:勝田恭平
Designed and Diagrammed
by Katsuta Kyohei

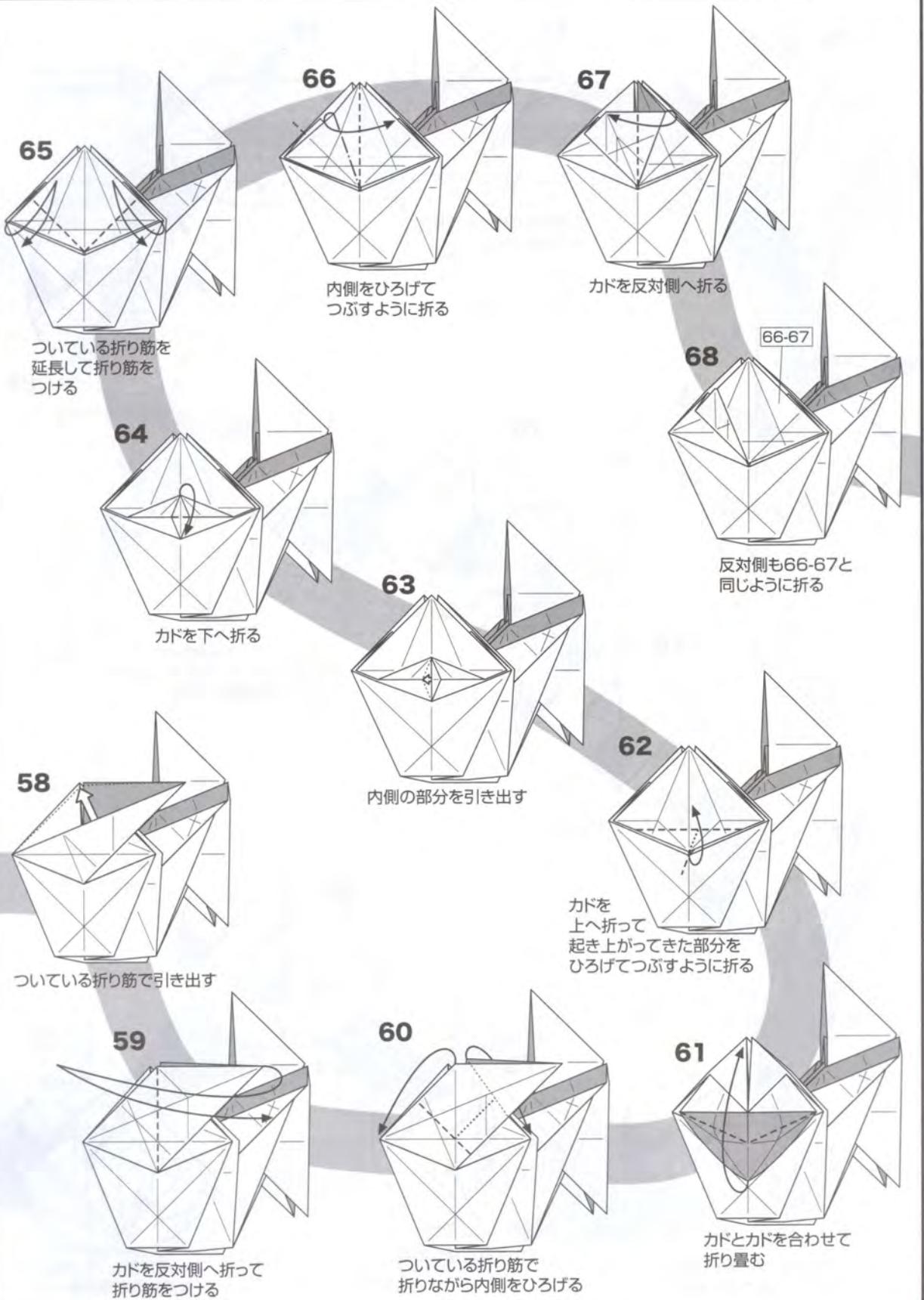


11**12****13****14****15****15****16****21****18****19****20**



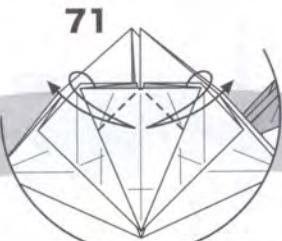




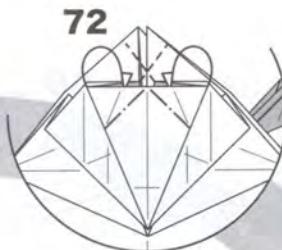




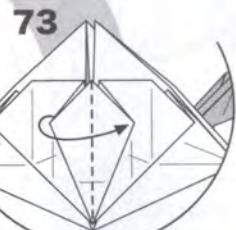
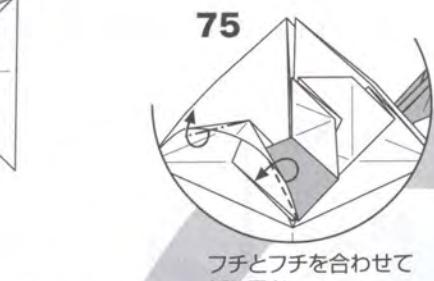
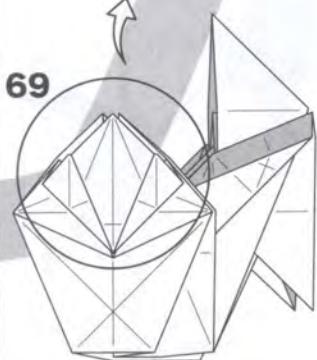
カドのところで
一番手前のすき間に
折り込む



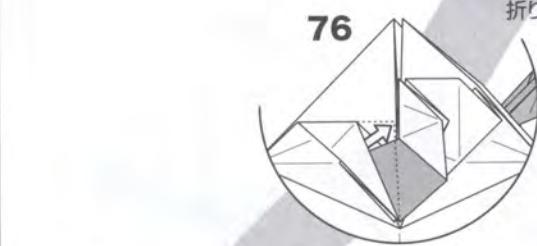
フチを折り筋に合わせて
折り筋をつける



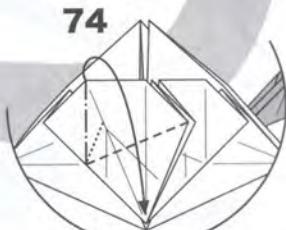
つけた折り筋で
カドを内側に折る



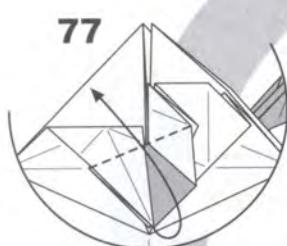
カドを反対側へ折る



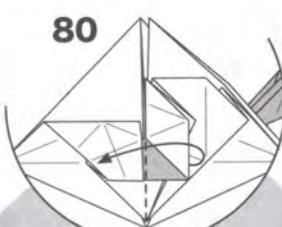
フチとフチを合わせて
折り畳む



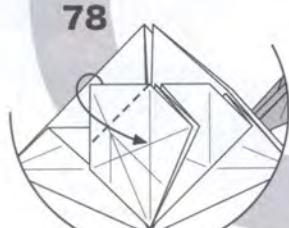
カドとカドを合わせて
起き上がってきた部分を
折り畳む



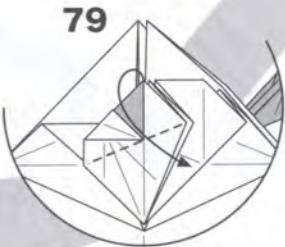
カドを反対側へ折る



カドを反対側へ折る



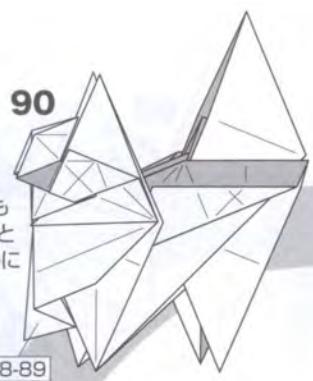
フチを折り筋に
合わせて折る



カドを反対側へ折る

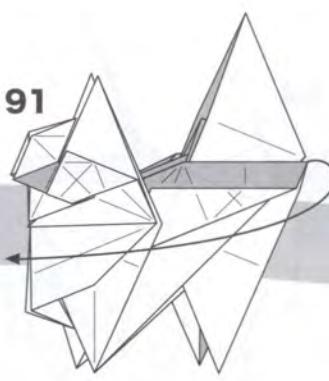


反対側も73-80と
同じように折る

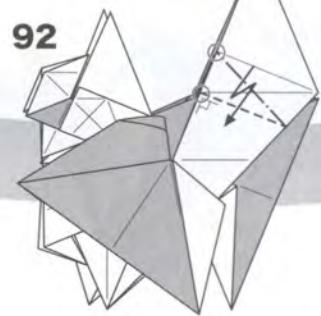


反対側も
88-89と
同じように
折る

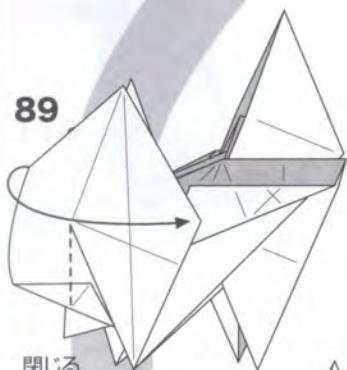
88-89



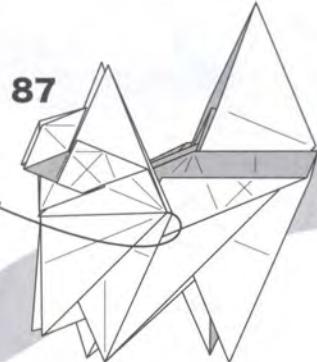
カドを反対側へひろげる



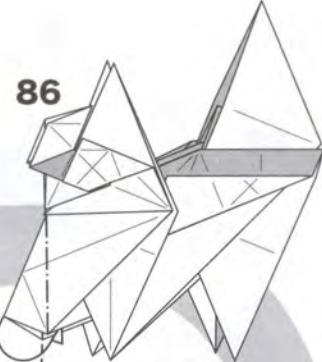
○を基準に段折り



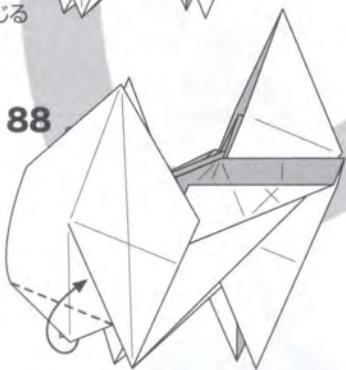
閉じる



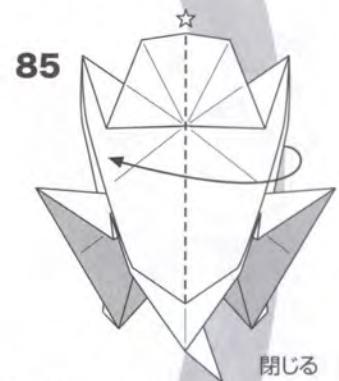
反対側へかるくひろげる



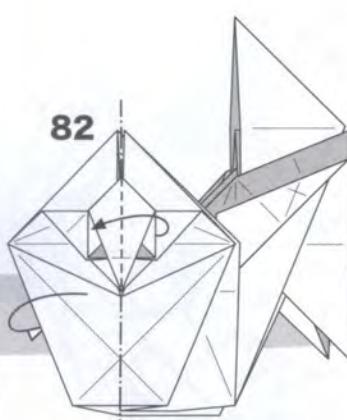
カドを内側に折る



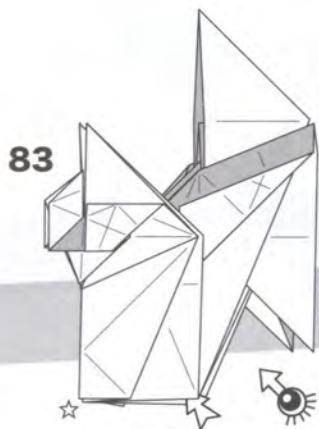
フチとフチを
合わせて折る



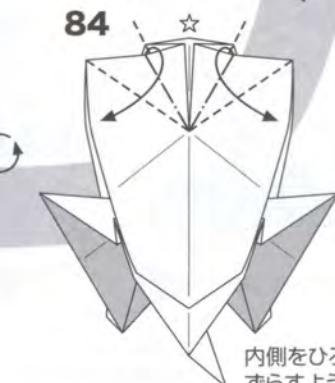
閉じる



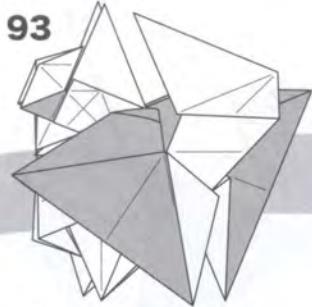
それぞれ反対側へ折る



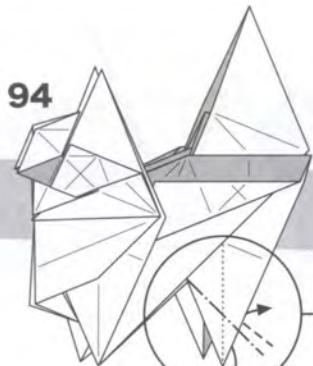
中心のすき間をかるくひろげる
次の図は下から見る



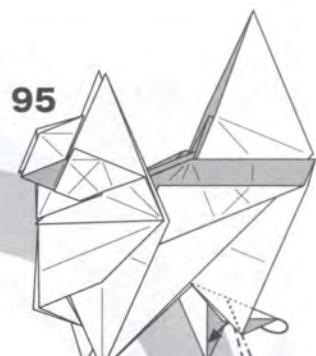
内側をひろげて
ずらすように折る



91の形まで戻す



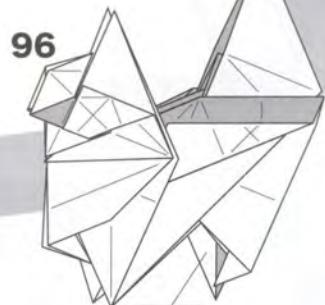
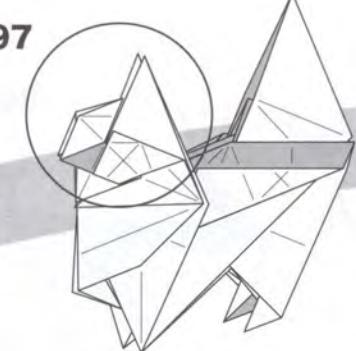
中わり折り



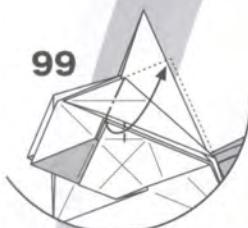
中わり折り



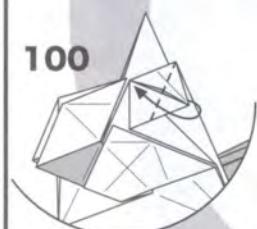
フチとフチを
合わせて折る



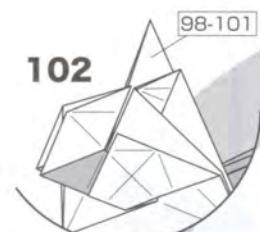
94-95
反対側も94-95と
同じように折る



内側をひろげて
つぶすように折る



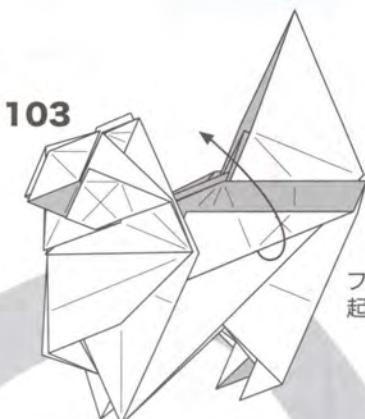
カドとカドを
合わせて折る



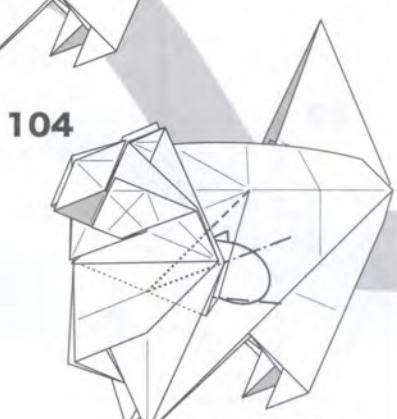
98-101
反対側も98-101と
同じように折る



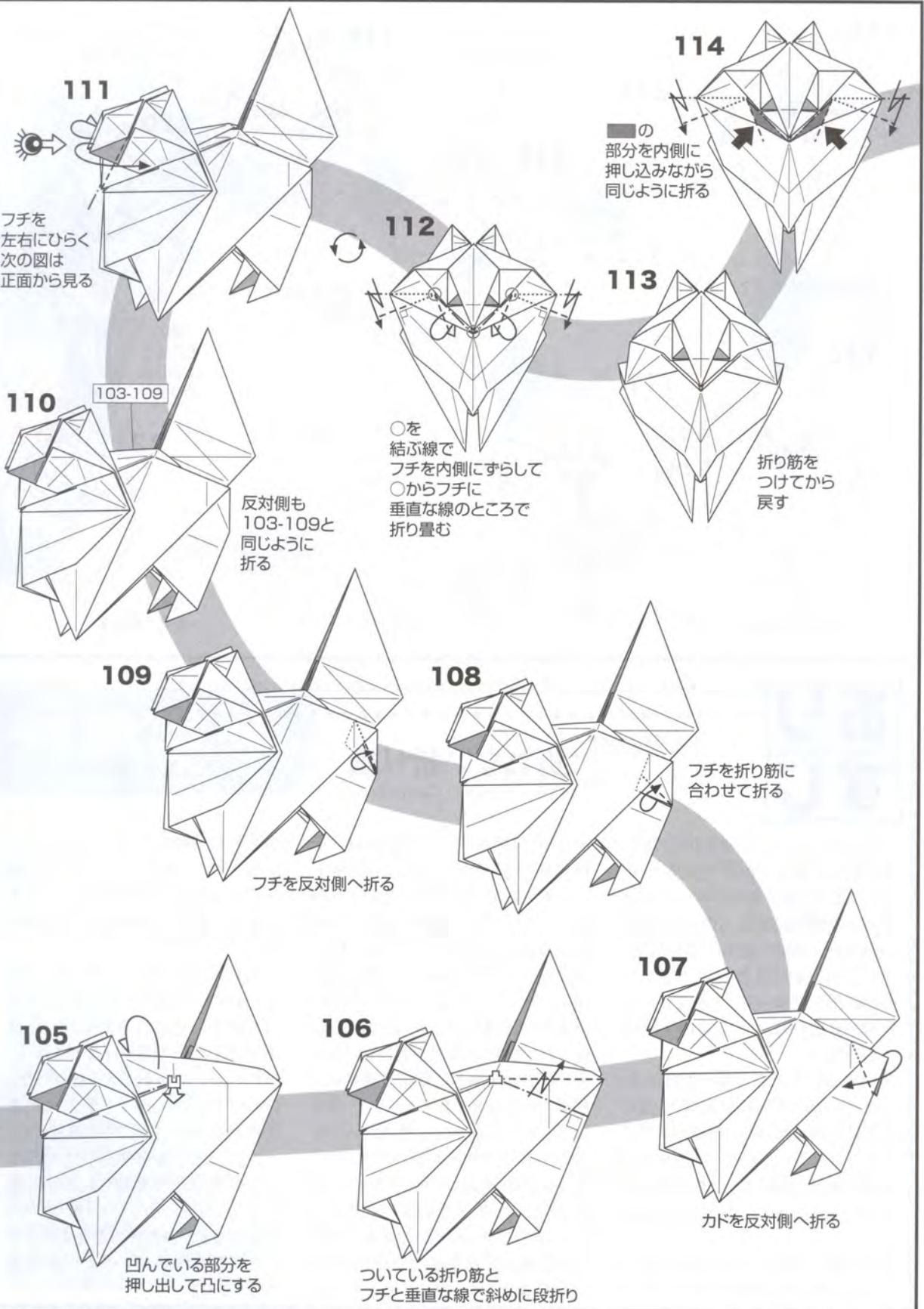
フチを内側に折る

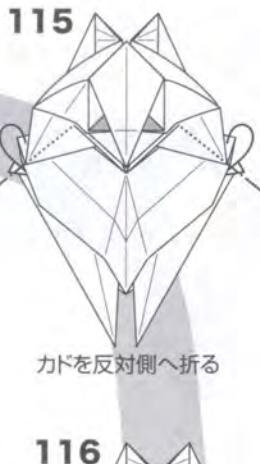


フチをかるく
起こす

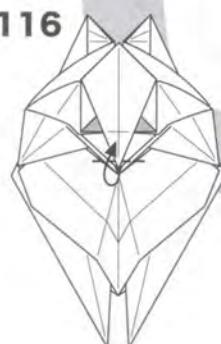


フチを内側に折る





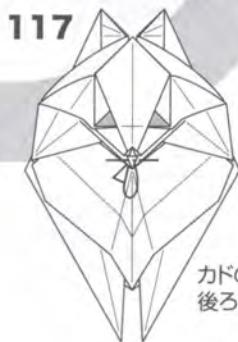
カドを反対側へ折る



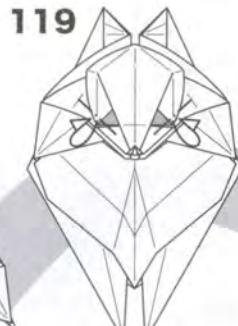
カドの先を折る



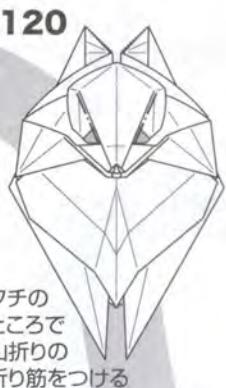
チをひろげて“おでこ”をつくる



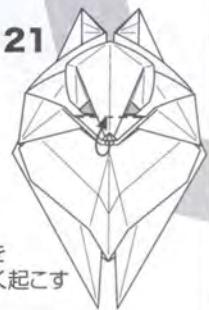
カドの先を後ろへ折る



カドを少し後ろへ折る



チのところで山折りの折り筋をつける



カドをかるく起こす

おりすじ

Orisuzi ("Fold-Creases")

折れない折り紙

Origami Models I Can(not) Fold

上原 隆平
Uehara Ryuhei

「上原さん、大人でも折れない折り紙って知っています?」と私に知人の某研究者が教えてくれたのは2005年の秋のことだった。その名も「川崎ローズ」と「前川デビル」というらしい。子供のとき以来、まともに折り紙なんぞやったこともなかった当時の私は「そんなのあるの?」と探し始めた。

川崎ローズの折り方が掲載されている『バラと折り紙と数学と』はすぐに見つかった。早速川崎ローズに挑戦してみるも、「なんじゃこりや」と挫折し続け、最初の1つを折れるまでに10日ほどかかった。これは手強い。

次に前川デビルの折り方が載っている本を探し始めた。2005年当

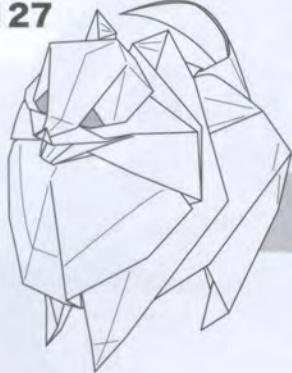
時、これは相当苦労した。どうも『折紙探偵団』とかいう雑誌のちょっと古いものに載っているらしいことがわかった。ネットで調べても、品切れだ。これは直接「おりがみはうす」というところに行ってみるしかなさそうだ。

おりがみはうすに入った瞬間、本能が「ここはヤバい」と告げた。なんといっても店員さんが折り紙チャンピオンの神谷さんにそっくりだ。意を決してその店員さんに探偵団のバックナンバーのことを聞いてみると、ネットには情報は出してないけれど、ほんの少しだけ残部があるとのこと。そこでせっかくなので神谷さんの作品集と折紙探偵団のバックナンバーを購入した。購入したときの店

員さんの雰囲気から「ヤバい、これは本人だ」と確信した。ともあれ、前川デビルの折り方がわかった。こちらは1つ目から1時間くらいで折れた。

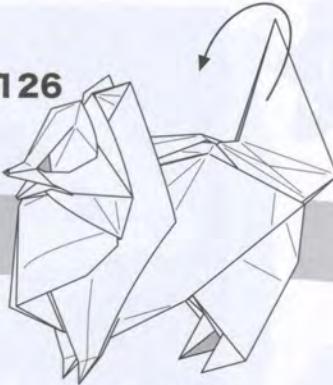
あれからもう12年もたった。今では川崎ローズは折り図を見なくても10分くらいで折れるようになり、前川デビルは折り図を見ながらなら、30分くらいで折れるようになった。けれどもエンシェントドラゴンは、まだ折れません。2017年の8月、コンベンションで「参考作品」として出していた神谷さんや北條さんの折り紙を見ていると、つくづく「折りすじ」が違うなあと思わずるをえませんでした。「参考作品」というよりは「目標作品」かな。

127



できあがり

126

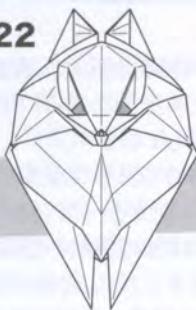
尻尾のカドを丸めて
形を整える

125



ついている折り筋で段折り

122

フチの
ところで
つまんで
前脚の形を
整える
反対側も
同じように折る

123

カドを
少し折る
反対側も
同じように折る

124



折紙三昧

(87)

Origami-Zanmai (This Origami and That)

メディアの役割

Roles of Specialized Media

このコラムで、私はときどき将棋のことを話題にします。もともとゲームとしての将棋が好きなこともあります、少々深く調べようと思い立ったのは『折紙探偵団新聞』を始めた頃からです。将棋と折り紙はともにパズル的な思考に裏打ちされた技芸であるといえると思います。いろいろ似ているところや違うところをあれこれ考えてみることも面白いのですが、そのころ考えたことの1つは、毎週発刊される将棋新聞がいったい何を報道しているのだろうということです。折り紙と将棋の大きな違いの1つでもあります、将棋は明確に勝負であって、従って勝敗や順位の変化など前週の結果がスポーツ新聞のごとく報道の対象とな

るのは想像がつきましたが、コラムや論考、観戦記文学などは『折紙探偵団新聞』にも何か役に立つかも、という思いもありました。以来、その将棋新聞である『週刊将棋』(日本将棋連盟/マイナビ出版)をほぼ毎週、駅の売店やコンビニで買って読むことがいつしか習慣となり、ほどなくして私はプロ棋士150名の顔と名前と少々の棋風や人となりがわかる将棋界マニアとなります。この習慣は2016年3月をもって30年の歴史に幕を閉じ、『週刊将棋』が休刊となるまで続きました。休刊の挨拶として「メディアをとりまく環境の変化は著しく、『週刊将棋』はその役割を終えたと判断いたしました」とありました。

さて、2017年になって、一般メディアで将棋の一部の話題が連日のように報道されました。ご存知のように、デビュー以来公式戦の連勝を重ねて新記録を打ち立てた藤井聰太四段のことです。この大記録に向けたカウントダウンめいたニュースが一般メディアで報道する価値があるとは思いましたが、一般メディアの報道はほんとに通り一遍で、マニアな私には全くもの足りないものです。この一連の“事件”的記事を是非『週刊将棋』で読みたかったと思いながら、メディアには継続するという役割もあるなど考えるのでした。

西川誠司 Nishikawa Seiji
日本折紙学会 評議員代表

展開図折りに挑戦!

Crease Pattern Challenge!

第109回

恐竜の頭骨

A Skull of a Dinosaur

菊地柾斗

Kikuchi Masato

Created: 2017/05/09

Paper Size: 54cm×54cm

Height: 15cm



頭骨という題材においては穴の表裏方法がひとつのテーマになります。カド同士をつなげたり、へこませたり…。模様として折りだす方法もあるでしょう。この作品では、色変えによって表現しています。

展開図をみればわかる通り、22.5度系で左右非対称です。展開図中央の五角形部分に紙が集まるように畳まります。歯の部分から反時計回りに畳んでいくとわかりやすいでしょう。紙の重なり方や紙のフチの動きに注目しながら折ってみてください。(紙の異なる重なり方は500通り以上あるようです。)

展開図を畳み終えたら、あとは骨の形を折りだしていく作業になります。どのフチがどの穴に対応するかは理解しやすいと思います。開いてつぶしたり、ずらすように折ったりすることで穴の形を作っていくします。紙の量がギリギリの部分もあるのでうまく調整しながら折ってみてください。

具体的な仕上げについて説明します。まず、下顎の部分(展開図右下)を展開すると同時に、歯の部分の紙を斜めに折ります。上下で歯の折り方が異なるので作例をよく見て仕上げましょう。上顎の歯を露出させるために頬から頭頂部付近にかけて斜めに細く段折りをしています。そのため平面にはならず、頬あたりが出っ張っています。

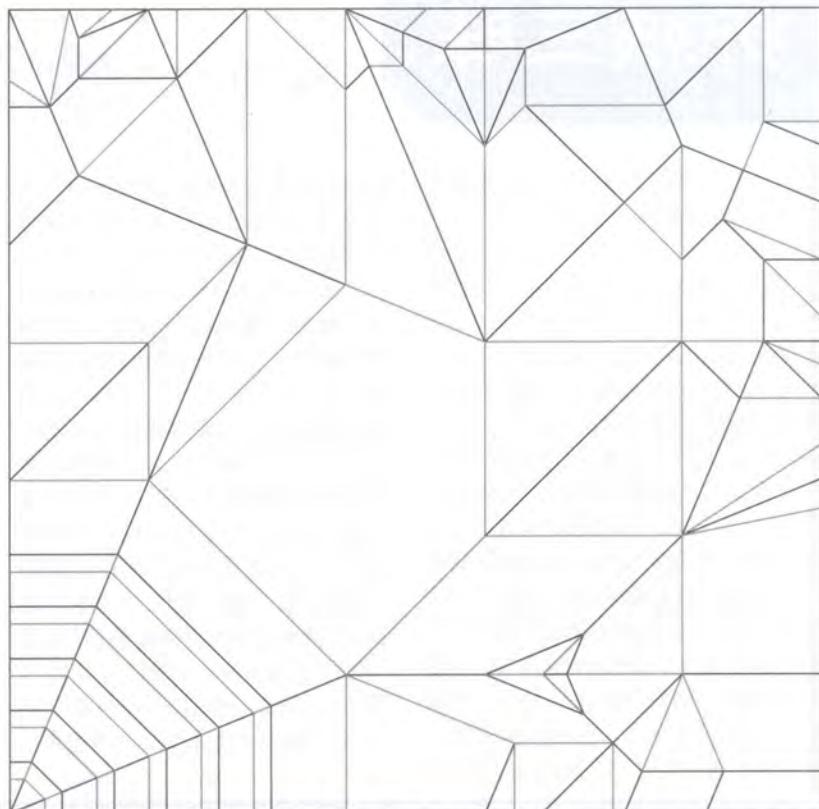
頭骨の上下が分離されるように、骨の輪郭を調整しましょう。

なるべく無駄な線を出さないようにするために、穴の部分以外の紙のフチは見えないように折るときれいな仕上がりになります。骨の部分が折れたら、全体の形を整えて完成です。

使用する紙に関してですが、35cmの普通折り紙用紙で十分です。インサ

イドアウトが醍醐味なので、表裏異色の紙を使ってください。作例では越前もみ紙を使用しています。

モデルはティラノサウルスですが、ところどころに紙が余っているので仕上げによっては他の種類の恐竜もつくることができそうです。実物の写真で穴の形や骨の輪郭などを確認しながら折るとよいでしょう。



今号は「ペーパーフォルダーの横顔」をお休みして「展開図に挑戦!」を2回分掲載します。

展開図折りに挑戦! Challenge!

Crease Pattern

Challenge!

第110回

バレリーナ

Ballerina

北西一貴

Kitanishi Kazuki

Created: 2015/05

Paper Size: 65cm×約91.9cm (1:√2の紙を使用)

Height: 30cm

過去の「人物をモチーフにしたコンプレックス作品」を見てみると、多くの創作家はボックスプリーツ主体の構造を選択されているようです。これは、長い手足やその先の指を折り出すのに蛇腹の構造が適しているからなのでしょう。しかし、ボックスプリーツでは使える角度の選択肢が少なくなり、細かいデザインができなくなるケースがあります。

このバレリーナで例を挙げると、服やスカートの装飾、顔の表情を折り出すことが極端に難しくなってしまいます。そのため今回は22.5度の角度系の構造を採用しました。その分手足の長さを充分に出すのが難しくなるとも思いましたが、そこは長方形の紙を使うことで(ムリヤリ)解決できました。

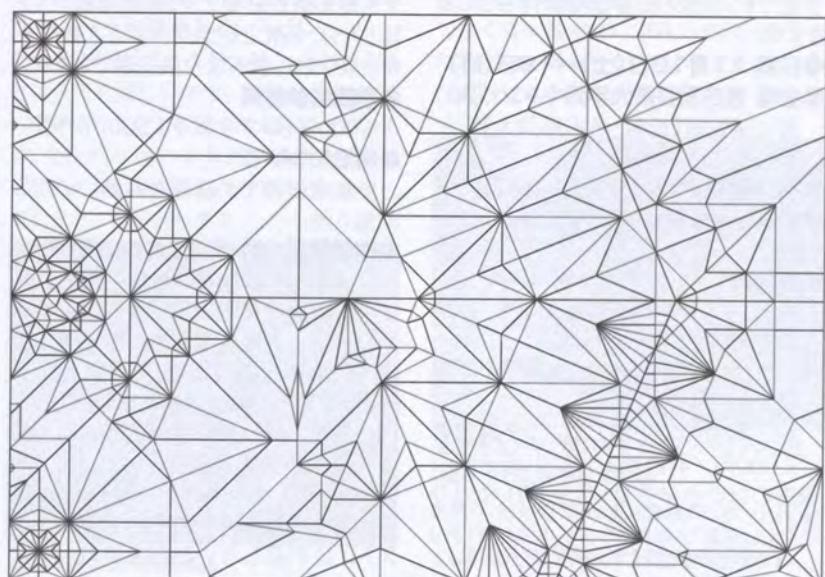
バレリーナを題材にするにあたって最も重点を置いたのは、衣装のデザインです。その1つのスカートは展開図を見ていただくと分かるように、紙の大部分の領域を使って成形しており、この作品の構造的な柱のような役割を担っています。

もう1つ胸部の方は、人物の上半身と服とを別々に折り出すという方法をとっています。先に身体を折っておくことにより、その体躯やポージングを気にせず(前掛けの様にはなりますが)服のデザインに専念することができました。

私は、自分の作品でも正確な展開図を書くということをあまりしません。性格が急け者なもんですから、試作で折ったものを開きながら本折りをするのが常になっています。そんなわけで、この「展開図折りに挑戦!」のお話をいただき初めてこの作品の構造と真剣に向かい合ったのですが、やはりいろいろと発見はあるんですね。袖のカドなんて出す意図も無かったのにどうやっててるんだろうと長らく不思議に思っていたのですが、目からウロコが落ちるとはこういうことなのかと一人でスッキリしていました。顔の構造もこんな

に複雑なことをしているつもりはなかったのに展開図を書きながら眩暈をおこしたものですね。

この写真では、バレエの代表的な「アラベスク」のポーズを表現していますが、上にも書いた様に普段はあまり使わない長方形の紙を使ってまで手脚や指を長く出せる様にしてポージングの自由度をあげています。もしこの作品を折ってくださる方がいるのならば、ポージングは私の作品をあまり参考にせず、あなたの思うままに仕上げてみてください。





Rabbit Ear

つまみおり

Information

◆WOD 2017

2017/10/24
～11/11

今年もWODイベントを開催します。WOD (World Origami Days)とは、10月24日～11月11までの期間に、「世界中の多くの人々にもっと折り紙を知ってもらおう」という目的でその期間中の折り紙活動情報を募集し共有する活動です。OrigamiUSAとJOASでは、このWOD活動をより大きく広げるため2011年から連携して進めています。

【私のWOD報告】

WOD期間中に「私のWOD報告」エントリーシートをおひがみはうすウェブサイト(<http://www.origamihouse.jp/wod2017/Application.html>)からダウンロードしプリントして、その上に皆さんのが折った作品を置いて写真に撮ってください。

◆第11回折紙探偵団名古屋コンベンション参加者募集

東海地方のコンベンションとして、会場を昨年の静岡から今年は名古屋に移し、第11回名古屋コンベンションを開催いたします。今回はスペシャルゲストとして、ブライアン・チャンさんをご招待する予定です。皆様のご参加をお待ちしております。

●日程 11月18日(土)～19日(日)

●会場 名古屋芸術大学西キャンパス

名古屋鉄道【徳重・名古屋芸大】駅から西へ約1Km、徒歩約15分

●折り紙教室(参加申し込み必要)

●お楽しみ懇親会(希望者のみ) 18日(土)

●参加費

大人:マガジン購読者4,500円／非購読5,000円

学生:マガジン購読者3,000円／非購読3,500円

親子割引のお子様1人につき購読者2,000円／非購読2,500円(親子割引適用のない小学生は「学生」扱いとなります)

1日のみの参加でも同額となります。

そしてFacebookやTwitter、ブログにアップしてください。折る作品は自由、参加も個人、小さなサークル、どんな単位でも、また何度も結構です。折り紙の輪を広げるためにどしどしご参加ください。



【折り紙テーマ展】

投稿者本人の創作のみとしますが、新作・旧作問いません。

投稿作品テーマ:2018年の干支「戌(いぬ)」

ウェブ展示:下にお知らせしている「アートミュージアム展示」として行います。

リアル展示:おりがみはうすにて作品展示を行います。テーマに沿った創作作品をおひがみはうすまでお送りください。

【アートミュージアム展示】

また、「私のWOD報告」、「折り紙テーマ展」の写真をWOD専用メールアドレスへ投稿していただいた場合は、その写真を折り紙アートミュージアム(<https://www.origami-art-museum.com>)内特設ページにて公開します。出典、創作者・制作者情報を記して写真をお送りください。

WOD投稿用メールアドレス:wod2017@origami.gr.jp

作品公開:2017年10月24日から

【同時開催】

OUSAおよびJOASの新旧ボードメンバーによるMy Best、My Favorite作品展示。

なお、OrigamiUSAのWOD活動は下記の特設Webページをご覧ください。<http://origamiusa.org/wod>

●親子割引について

親子割引は保護者が参加する場合、一緒に参加するお子様2名まで適用できます。保護者は親子でなくてもかまいません。保護者の方は、つきそいのみの場合でも参加費が必要です。折紙用紙セットは1人分、名札と記念グッズは人数分配布となります。教室は全員受講できます。

●懇親会参加費

4,000円(中学生以下1,500円)予定

●宿泊について

参加者皆様での確保をお願いいたします。

●作品展示、コンテストについて

会場内にて参加者の皆様の作品展示ゾーンを設けます。また、東海友の会メンバーによる企画展示も行なう予定です。あわせて、創作折紙(ご自身の創作作品)コンテストを実施いたします。コンベンション参加者の人気投票により最優秀賞1名・優秀賞2名を決定し、賞品を贈呈させていただきますので、多数の応募をお待ちしています。創作折紙コンテストには出品しない作品も何れも事前

申し込みは不要ですので、皆様のご自慢の作品をぜひご持参ください。

●国際大学折紙連盟作品展

●折紙講師、日本折紙学会折紙指導員受験者の募集

名古屋コンベンションで、講師を担当していただける方を募集します。ぜひこの機会に講師として参加してみませんか。あわせて、日本折紙学会折紙指導員制度に基づく折紙指導員認定も行なっていますので、資格取得ご希望の方はこの機会にぜひお申し込みください。

スペシャルゲスト ブライアン・チャン



ブライアン・チャン氏は2004年から主に不切正方形一枚折りのスーパー・コンプレックス折り紙を創作しています。

◆第8回韓国折り紙コンベンションレポート

前川 淳

8月19日と20日の両日、第8回韓国折り紙コンベンションに招待者として参加した。会場は、ソウル市の南西にある、ホールや教室、食堂、宿泊室のある複合施設で、参加者は約200名であった。今回の招待者は、香港のケイド・チャンさんとわたしで、ほかに、山口真さんや川村みゆきさんなど日本から10人ほどと、第23回折紙探偵団コンベンションの招待者であったベス・ジョンソンさんとマーク・ボライソさんらも参加した。日本と韓国のコンベンションを連絡させて、相互に盛り上げようという山口さんのアイデアが生かされたかたちである。

会に参加した韓国の折り紙愛好家は、



▲段ボールで巨大折り紙の飾り台を作るグループ(右)と、別の作品を折っているグループ(左)

中高年の女性と、小学～大学の青少年(主に男性)が多かった。これは、日本とよく似ている。日本と同様、青年たちが、コンベンション期間中にまめまめしく動いていた。彼らが、期間中に「巨大折り紙」を折って展示するのも面白い。飾りかたのノウハウも手馴れたもので、作品ができあがっていくさまを見ることができる。そうした「折り紙青年」のひとり、長期の日本滞在の経験があり、「おりがみはうす」から作品集も出しているユ・テヨンさんは、兵役中に休暇をとての参加で、親に会うよりも前に、会場に来たという話だった。

わたし自身は、ふたつの講習と、全体講演をおこなった。講演は、映写スライ



▲ずらりと並んだ巨大作品

ドの文字が英語で、日本語で話して韓国語に通訳されるというものになった。チャンさんは、英語と漢字のスライドで、英語で話して韓国語に訳されるというのだ。このように、言語の違いはあるのだが、折り紙は一種の共通言語なので、心配は無用である。会は、もてなしのところにあふれ、懇親会での紙飛行機の的当てなどのゲームもたのしく、翌日のソウル市内観光も含めて、充実した3日間だった。

このレポートを書いている今も、なにかと騒がしい朝鮮半島の情勢であるが、折り紙の世界と、そこに関わるひとたちの世界は、穏やかで平和である。



▲思わず白熱化する懇親会のじゃんけん大会

(編注: P.24に関連写真掲載)

◆第23回折紙探偵団コンベンションレポート

ベス・ジョンソン

第23回折紙探偵団コンベンションに招待されてとても光栄でした。これまで世界中のコンベンションに参加しましたが、各国の個性があって、愛好者が集まって折り紙を楽しんで、情熱を分け合う共通の目的があります。探偵団コンベンションも同じで、忘れられない素晴らしい経験になりました。

東京の探偵団コンベンションは初心者から大学の先生までの400人以上が参加する大規模なコンベンション。他のコンベンションの形式と似ていて、講演会と講習が3日間に行われます。土曜日の夜の懇親会では素晴らしい食べ物、飲み物とお祝いがありました。コンベンション後、月曜日のエクスカーションで、日光東照宮に行って、名物の餃子も食べました。KIREI! OISHII!

講習はさまざままで、伝統的な作品に加え、設計された理論的な作品の教室がありました。三谷純氏の曲線折り紙と宮本好信氏の回転建立方式入門の講習を受けました。どちらも興味深く思考を刺激するもので、私にとって新しいものでし

た。日本の折り紙のレベルは高いので、講師としては楽しい。今回は3作の講習をやりました。カーディナル、どんぐり、そしてリス。上手な折り紙生徒、お手伝いの翻訳者と書画カメラのおかげで問題なく講習終了しました。

出身国や言語にかかわらず、このようなユニークな機会とインスピレーションを共有するコミュニティの一員となることはとても嬉しいです。日本の文化は私のアメリカ文化とはまったく異なっています。文化的な違いや言葉の垣根を切り開くためには、時には深く考えたりとまとつてしまうことがあります。しかし折り紙は



▲宮本好信氏の講習作品

その分断の橋渡しをするのを助け、私の人生はとても豊かになったと感じます。

全体的に、探偵団はとても楽しいコンベンションでした。私自身たくさん学びました。また、探偵団の経験は山口さんのおかげによるもので大変感謝しています。参加者を歓迎し、コンベンションだけでなく日本滞在中に楽しい時を過ごすために常に考えてくださいました。

(翻訳: マルシオ・ノグチ)



▲書画カメラで講習をするベス・ジョンソン氏

(編注: P.21に関連写真掲載)

お詫び: 前号の「Orist五月祭展示レポート」において「菊地征斗」さんのお名前を「菊池」と表記していました。訂正してお詫び申し上げます。

◆折り紙の新刊読者プレゼント

出版社の協力により、折紙探偵団マガジンの購読者に新刊書をプレゼント。応募方法:ハガキ又はメールにて、名前、住所、電話番号、年齢を明記し、本誌の感想などを

も添えて以下までお送りください。1通につき1書名、複数書かれた場合は無効とさせていただきます。締め切り:10月31日/応募先住所:113-0001東京都文京区白山1-33-8-216 おりがみはうす内日本折紙学会宛。またはE-mail:info@origamihouse.jp



◆『恐竜のおりがみ』/川畠文昭・著、B5判、128P、定価1,500円+税、誠文堂新光社
■「新・おりがみランド」シリーズ『恐竜のおりがみ』1~3から作品をセレクトし、初級の作品を新たに加えて再編集。3名様にプレゼント



◆『動物のおりがみ』/川畠文昭・著、B5判、128P、定価1,500円+税、誠文堂新光社
■不切正方形一枚折りの動物作品約30種を収録。初級~中級難易度。3名様にプレゼント

◆東京コンベンション 折紙探偵団マガジン購読権抽選について

8/12に「コンテストで投票をした人の中から2名のかたに、マガジン購読権を授与する抽選をおこなう」と予告していたのですが、8/13の閉会式の際に、この抽選をせずにコンテスト結果発表を終えてしましました。大変申し訳ありません。抽選を9/2の

東京友の会例会で実施したので、結果をこの場でお知らせ致します。厳正な抽選の結果、以下の2名のかたに購読権を授与することになりました。櫻田直弘さん(東京都)、山田裕子さん(大阪府)

(JOAS折り紙コンテスト事務局 北條)

計は450,000円です。ご協力ありがとうございます。基金のお金は、各地の折紙探偵団コンベンションの招待者に贈られます。(50音順、敬称略)稻吉秀尚、金子淳信、田中源太郎、エリック・ラン

/時間=13:00~15:30

●10月21日(土)/講師:亀井浩平/作品:ハシビロコウ2

※11月は名古屋コンベンションのため、月例会はお休みです。

東北友の会 ※折り紙は各自持参

基本的に毎月第3日曜日の午後に開催。参加ご希望の方は、メール hrncb635@ybb.ne.jp(芦村俊一)まで問い合わせください。

関西友の会 ※折り紙は各自持参

次回開催は12月の予定。詳細が確定の際には、公式サイトにてご案内致します。http://tatekoo.net/KT/fold_it_or_go/

九州友の会 ※折り紙は各自持参

会場=佐賀県立アバンセ4階第5研修室/参加費=500円(中学生以下100円)/時間=13:00~16:00

●10月22日(日)/講師:堤 政継(予定)/作品:未定

●11月26日(日)/講師:岡 雅夫/作品:薔薇(創作:川崎敏和)

◆吉野一生基金への寄付報告

2017年9月12日現在、吉野一生基金には新たに4名の方から16,000円の寄付をいただきました。第28期寄付金額の合

も添えて以下までお送りください。1通につき1書名、複数書かれた場合は無効とさせていただきます。締め切り:10月31日/応募先住所:113-0001東京都文京区白山1-33-8-216 おりがみはうす内日本折紙学会宛。またはE-mail:info@origamihouse.jp

◆読者プレゼント当選者発表

『クリエイティブ折り紙』の当選者(敬称略):初音みね子(埼玉県)、増田節子(神奈川県) /『秀麗な折り紙』の当選者(敬称略):小野友彰(東京都)、小菅章裕(山梨県)

JOASホール今後の予定

◆「OrigamiATC研究会」

少人数でわいわいとお茶を飲みながらの会です。お気軽にお参加ください。

10月15日(日) / 参加費=1,000円 / 11:00~16:00 / 内容=ATC交換会、情報交換等 / 定員=20名 / テーマ=○○の秋 / 参加申し込み締め切り:10月12日(木)

ATC交換会では、郵送参加も受け付けています。詳しくは本誌P.25又はおりがみはうす公式サイトをご覧ください。

公式サイト=<http://www.origamihouse.jp/> お問い合わせ=info@origami-atc.jp

◆「ある折り紙創作家の教室」

12月17日(日) / 講師=神谷哲史 / 講習作品=未定 / 参加費=3,000円(材料費別) / 11:00~16:00 / 定員=28名

※対象は、小学校5年生以上です。

※小学生の方が参加される場合は、必ず保護者の同伴をお願いします。

※会場へは参加者および同伴者(会場費500円が必要)のみ入場可能です。

※「ある折り紙創作家の教室」は、2週間前(今回は12月4日以降)からキャンセル料(受講料の半額)が発生しますので、ご注意ください。

※申し込みの受付は10月1日からとなります。ご注意下さい。

お申し込みは info@origamihouse.jp で氏名、住所、Email、電話番号、教室名をお知らせください。

編集後記

■今年のコンベンションはいろいろな意味で良かった。■まず、若手が育ってきて運営もスムーズで、老いた人間にはそろそろと言われているようだ。■特に作品展示会場は好評であった。■会場は展示された作品も華やかでそれぞれが主張していた。■中でもICOAの展示は過去の展示と趣を変えそれぞれの作品をいいじに展示していた。■展示場全体を担当してくれた堀口氏には感謝。■堀口氏自身は折り紙を楽しむ時間はなかっただろう。■体調を考え、BOS50周年記念コンベンションに参加できなかつたことはとても残念であった。■次号のマガジンで、BOS50周年特集を考えている。(や)

日本折紙学会公式HP

折紙探偵団 <http://www.origami.gr.jp/>

折紙探偵団マガジン

2017年9月25日発行 第28巻3号 通巻165号
発行所/日本折紙学会

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

Phone & Fax / 03-5684-6080

発行人/西川誠司

編集人/山口 真

編集スタッフ/松浦英子、神谷哲史

デザイン/おりがみはうす

翻訳/立石浩一

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

広告のコーナー

I ❤ ORIGAMI おりがみはうす商品案内

このページの商品の取扱いはすべておりがみはうすです。

日本折紙学会とは別になります。

ATTENTION! : This advertisement is for Japan-internal use only.
For overseas shipment, please refer to the OrigamiHouse Web Site.



第23回折紙探偵団コンベンション

折り図集vol.23

日本折紙学会編 / 2,700円(税込) / 送料430円
B5判 / 全304頁 / 64作品収録

収録作品=ダイヤモンドBOX:川崎敏和 / シマエナガ:勝田恭平 / 雄鶴:萩原元 / シオマネキ:神谷哲史 / カーディナル:ベス・ジョンソン / サメ:ケイド・チャン / ハッピーホエール:グエン・フン・クオンほか

書籍名/著者/編者	価格(税込)	送料	内 容
ユ・テヨン折り紙作品集 山口 真編 立石浩一 訳	3,130円		B5判 / 全180頁 / カラーワンショット4頁 / 20作品収録 新進気鋭の若手作家ユ・テヨン氏の折り紙作品集
クエンティン・トロリップ 折り紙作品集 クエンティン・トロリップ 著 山口 真編 立石浩一 訳	3,130円		B5判 / 全180頁 / カラーワンショット4頁 / 19作品収録 トロリップ氏独特の感性が光る動物折り紙作品集
神谷哲史作品集 神谷哲史 著 山口 真編 立石浩一 訳	4,320円		B5判 / 全228頁 / カラーワンショット4頁 / 19作品収録 超複雑系折り紙の創作活動8年間の集大成
神谷哲史作品集2 神谷哲史 著 山口 真編 立石浩一 訳	4,320円		B5判 / 全232頁 / カラーワンショット8頁 / 16作品収録 折り紙界の最先端、神谷氏の約8年ぶりとなる作品集
小松英夫作品集 小松英夫 著 山口 真編 立石浩一 訳	4,320円		B5判 / 全232頁 / カラーワンショット8頁 / 20作品収録 折り図も1つの作品として捉える小松氏の初作品集
西川誠司作品集 西川誠司 著 山口 真編 立石浩一 訳	3,460円		B5判 / 全196頁 / カラーワンショット4頁 / 32作品収録 シンプルからコンプレックスまで幅広く楽しめる本
折紙図鑑「昆虫2」 ロバート・J・ラング 著 山口 真編 立石浩一 訳	3,780円		B5判 / 全196頁 / カラーワンショット4頁 / 18作品収録 初心者お断り、精巧で緻密な昆虫折り紙の本
面～The Mask～ 布施知子 著 山口 真編	3,560円		B5判 / 全200頁 / 全27作品カラーワンショット4頁 / 18作品収録 作者がユニットに出会う前の、お面だけの作品集
エリック・ジョワゼル —折り紙のマジシャン— 山口 真編著 立石浩一 訳	5,180円		B5判 / 全200頁 / 全144頁 / カラー80頁 2010年に逝去したジョワゼル氏の作品写真集
第22回折紙探偵団コンベンション 折り図集vol.22 日本折紙学会編	2,700円		B5判全304頁 国内・外から集まつた秀作61作品を収録
第21回折紙探偵団コンベンション 折り図集vol.21 日本折紙学会編	2,480円		B5判全288頁 国内・外から集まつた秀作57作品を収録
第20回折紙探偵団コンベンション 折り図集vol.20 日本折紙学会編	2,480円		B5判全288頁 国内・外から集まつた秀作61作品を収録
第19回折紙探偵団コンベンション 折り図集vol.19 日本折紙学会編	2,480円		B5判全288頁 国内・外から集まつた秀作53作品を収録
第18回折紙探偵団コンベンション 折り図集vol.18 日本折紙学会編	2,380円		B5判全272頁 国内・外から集まつた秀作48作品を収録

書籍2冊の送料は640円です。3冊以上は本によって異なりますので、お問い合わせください。書籍と紙はそれぞれ別発送となります。

商品名	価格(税込)	送料	内 容
恐竜柄おりがみ用紙	1,080円	1~2セット	35×35cm / 10枚入り / 70kgの洋紙(コルキー)に細かなウロコ柄を印刷
恐竜柄おりがみ用紙 折り図つきセット	1,300円	550円	恐竜柄おりがみ用紙+ドラゴン(北條高史・作)の折り図セット
『折紙探偵団マガジン』専用ファイル	810円	1冊370円 2冊420円	193×268×28mm / 箔押しロゴ入り / 『折紙探偵団マガジン』1年分(6冊)と、会員特別配布物が収納可能なプラスチックファイル

折り紙用紙専門のオンラインショップ！

おりがみはうす オンラインショップ

<http://www.olshop.origamihouse.jp/>

おりがみのトーヨーの商品を
25%引きで販売中！*

*創作専科・アウトレット商品等を除く / 発送は週1回木曜日

詳しくは
検索サイトで

おりがみはうす

検索 CLICK!

オンラインショップ限定価格で
一般店舗では取り扱いのない
大判折紙や単色折り紙等々、
700種類を超えるおりがみを
豊富に取り揃えています！



商品のお申し込み方法

先に郵便振替か現金書留で料金(商品価格+送料)をお送り下さい。入金を確認後、商品を発送させて頂きます。ご希望の商品名と連絡先の記入(郵便振替の場合は振替用紙の「通信欄」に記入)をお忘れない様お願いします。

郵便振替番号 **00120-9-715400**

加入者名 **おりがみはうす**

※PayPalによるお支払いも可能です。

詳細は公式HP <http://www.origamihouse.jp>まで

※折紙探偵団の購読申込みとは別の口座です。くれぐれもご注意ください。

※郵便振替用紙は郵便局備え付けのものをご利用ください。

※現金書留の場合は下記の住所へお送りください。

※商品のお届けは通常、送金から約1週間～10日です(お盆・年末年始等を除く)。

※商品名、数量及び料金をよくお確かめの上ご注文ください。



ギャラリー おりがみはうす

〒113-0001 東京都文京区白山1-33-8-216

TEL:(03) 5684-6040 FAX:(03) 5684-6080

E-mail : info@origamihouse.jp

月～金 12時～15時 土・日・祝 10時～18時

The Origami Tanteidan Digest

The objective of the Origami Tanteidan Digest is to share the articles on Origami Tanteidan magazine and provide an English summary of most (but not all) text. The numbers indicated as "Page xx" refer to the page numbers of the original articles in the magazine. While not all content is translated, it should give you an idea about what the article is about. We hope you will enjoy. Let us know if there is anything we can do to improve or any further comments. Please contact our editorial department at: webman@origami.gr.jp

(Page 7) Origami and Its Neighbors

#84 - Installation

By Tomoko Fuse

The Japan Alps Art Festival is now over. When checking the models at the end, insect droppings and other garbage accumulated between the pleats of infinite-fold belts, and some parts were stained. That was especially the case for flat models there were displayed flat on the floor. While going through the cleaning process, a few thoughts came to my mind. The venue was not really a gallery or an art museum but just a vacant house or an outdoor place. Therefore, the installation would require taking into consideration the environment and space used.

It would have been better to consider that it would be just a one-off exhibition for the models. Considering the time and effort required, it is not worth from a monetary or time perspective. But because the experience of the viewers of the "infinitely folded Katsuyama" exceeded expectations, it was more about what the creator wanted to see and share with the audience rather than what the creator wanted to exhibit. So, let's say it was all good.

Origami work is delicate because they are made of paper. There was some rain during the second half, so the paper gradually got swollen and I was worried about the shape, but I managed it. I also felt that the models which were seen by many people expressed being tired for "being seen too much". Origami is not all, but the models usually look the best right after the last step when the folding is completed. The degradation progresses after point.

I have some friends who have been studying the "Sogetsu" style for many years. I heard that

Table of contents

- About - Origami Tanteidan Digest
- (Page 7) Origami and Its Neighbors
- (Page 13) Close-up
- (Page 16) From the Bookshelves of the JOAS Library
- (Page 18) Here We Are, THE ORRIGAMI TANTEIDAN
- (Page 36) Orisuzi ("Fold Creases")
- (Page 37) Origami-Zanmai (This Origami and That)
- (Page 40) Rabbit Ear Information

Translated by Marcio Noguchi

Ikebana is exhibited for just three days to about one week. And they are displayed only once. It is a tremendous amount of effort and energy for a one-time exhibit. That is the normal world. So, I should apologize.

By the way, I bumped into Hidetoshi Fuse, an arts critic, walking in the mountain near the venue. "Are you Fuse-san?" "Yes, and you are Fuse-san, right?" We both knew ourselves just by name. Hidetoshi Fuse mentioned that he was intrigued because he found my name next to his, when searching on Amazon. It was a quick chat, and we parted after saying that we should catch up one of these days to talk about plastic arts.

This Summer is about to end.

Still, summer flowers like the sunflowers, sweet potatoes and silver cock's combs provides rich colors to the flower beds engraving the human activities in the deep green mountains. The forest green tree frogs grow steadily. So far, I saw 8 common hawker dragonflies growing wings and flying into the moisture-rich sky.

(Page 13) Close-up

Imagining How Issei Yoshino Designed His Animal Origami Models

By Takashi Hojo

Takashi Hojo was born in the Tochigi prefecture, and now lives in Tokyo. He is also a board member of JOAS. For the development of this article he appreciates the support he received from Seiji Nishikawa, Hideo Komatsu and Makoto Yamaguchi.

Horse and Apatosaurus

It all happened some 20 years ago, just some time after I joined the Tanteidan origami group (the predecessor of the JOAS). That was when I

put my hands on the diagram of the Horse by Yoshino, fresh out from the oven. (Figure 1). Back home, I felt a moment of ecstasy and immediately started folding. After some grappling, I finally managed to finish it. (Since I only had a 24cm paper, I must admit the model was a bit damaged on the inside…)

The highlight of this model is the "spiral pattern" in the name, which I thought I understood well its construction as a three-dimensional structure. Nevertheless, I could not prevent myself wondering its folding process that was like a flow of sequences. The preparation process that involved some pre-creasing steps was quite sophisticated. Before the diagram was published, I made a few attempts of folding just the mane by simply "staring" at it and trying to understand its construction. But I was never successful. This design with rich features, and parts with great influence of the surrounding structure, and fitting well as a whole rather than just handled just by itself, was one that I thought then that I could never reach. And I still can't reach in the present.

By the way ... If you take a closer look, although the Horse step 58 and the Apatosaurus step 35 are different in length, width and proportion, it seems that they are basically the same structure" (Figure 2).

(Incidentally, the step numbers indicated in this article is based on the diagram of 'Issei Super Complex Origami' for the models that were published in multiple journals and books.) Now, the Issei Yoshino's Apatosaurus was called "Brontosaurus" on the first publication of Tanteidan Origami Group Newspaper Issue 1. And the corresponding step number for that model was 36, which is what I saw at that time. Since then, every time I saw new models from Yoshino, similar thoughts came to my mind frequently.

Proposal for classification of Yoshino's models
When classifying Yoshino's models roughly by "structure / modeling policy", I think that it is easy to grasp using the following system. I recognize that there are some situations when the models assigned to the propose ABC classification may cross categories, as well most fit totally one classification. Also, there could be categories too, but for the sake of this article I am suggesting considering the ones I am presenting below.

- A) Models based on the traditional bases using a single sheet folded with a policy of "single square sheet, no cuts" or modular models with small number of sheets ("Nue" Japanese chimera, Tiger, Baby Tyrannosaurus-Rex, Motorcycle)
- B) Single sheet models based on non-traditional bases with a policy of "single square sheet, no cuts" (Boar, Horse, Tyrannosaurus, Apatosaurus,

Triceratops, Spinosaurus, Pteranodon, "Kabuto" Samurai Helmet, Fighter Jet)
C) Multiple sheet modular models (Tyrannosaurus Rex Skeleton, Triceratops Skeleton)

Now, the Conclusion

After all, what I'd like to say this time in this article is illustrated in Figure 3.

The idea is that many of the models listed in the category B above were created under the same creation policy under the thinking system as shown in Figure 3, even though they seem to have little commonality or seemingly no commonality.

The original story behind what is illustrated Figure 3 should be something that those involved in biology may recognize, which is the picture of "ontogeny recapitulating phylogeny" described in "Haeckel's Recapitulation theory." It is the picture of the embryogenic processes of fish, salamander, turtle, chicken, pig, human, etc. which are drawn side by side. I saw that picture in a junior high or high school biology book about thirty years ago, are they still using the same picture currently?

There are many parts that are not accurate in individual pictures of the original material, and there are also various other inaccurate elements too. However, even if there are various problems in applying this way of thinking to the embryogenesis of living organisms, don't you think it is a plausible good idea applied for models? I think that Issei Yoshino might have thought of the system of model creation in that way, although it is unknown whether he was aware of the illustration of the recapitulation theory when creating the animal models.

The pictures arranged in the upper, middle and lower rows of Figure 3 show that "the edges of the square paper are folded backwards for the head, the tail, and the leg which can be pulled out longer or wider." Although the width folded at that point is different for each model, they basically share the same idea.

Looking at the pictures arranged in the middle row, you can notice a strong connection between the "Apatosaurus" and "Horse" which is difficult to be seen in the other models. However, it is possible to see a clear similarity with the "Spinosaurus". As you fold the other models, you can feel the commonality of the structure at that stage. In addition, I would like to bring your attention to the structure of the head and their similarities between the "Spinosaurus", "Tyrannosaurus", and "Salmon" (which is designed with a white lower jaw with a color upper jaw on top of it).

"By using this basic structure/idea, if you change the width of the edge folded on the upper row of

Figure 3, you should be able to design various animals", was probably what Yoshino thought, don' you agree? This design policy/method/methodology -- to advance from the upper row to the middle one on Figure 3 -- is what I arbitrarily call as "Yoshino style base", "Yoshino sketch skeleton", or "Yoshino embryo development".

By the way, the "F15 Eagle Fighter" diagrams published on Tanteidan Origami Newspaper Issue 40~42 (designed by Issei Yoshino, traced by Yoshihisa Kimura), despite of the fact that it is a machine and not an animal, also presents a similar design policy in Figure 3.

The direction of "Yoshino-style base"

As a design system for animal models that existed during or before the same period of Yoshino formula, it seems that there were roughly four directions and their applications and combinations (again, strictly speaking, the categories may differ for different people, but here I am indicating my opinion of classification).

1. Distribute the "points" /corners from the traditional bases and basic structure that folds into one piece and assign it each part / appendage of the animal.
2. Like Jun Maekawa's "Viva! Arrangement" model compilation, position the molecules on the paper at basic unit of 22.5-degree angles.
3. Like the models of Akira Kawamura in his "Origami Animals Album" collection and models Neal Elias, use box pleating in the basic structure.
4. Like Toshiyuki Meguro's Origami Molecule Theory and the design using the program "Orio", as well as Robert Lang's animal and insect models, consider the necessary length for each part of the completed form, arrange the "points" /corners on the paper and generate the crease lines to collapse the model.

On that basis, there are many designers with "techniques to adjust the finished form, balance and silhouette" based on the method for the second and subsequent steps. Those methods create an impression of "universal degree" or "an all-round feeling to create anything", and the efforts to achieve the grouping method, will occur at different angles, directions and steps. With the Yoshino-style bases, it is necessary to "look for a balance between the length of the "point" /part of final element and the design of the part, by the variation of the amount of the edge folded illustrated on the top row of Figure 3. In this step, the trial-and-error process should be repeated multiple times.

Looking at "the structure of the upper and middle rows in Figure 3" which appears as a result after the step, I think it seems that it is easier to apply the "biological" impressions as compared to the other animal creation

methodologies already mentioned. The feeling that "the shapes up until a specific stage in the middle row are somewhat alike each other, gradually and little by little differentiating towards the final form throughout all the steps and acquiring the features" is relatively strong. What you see on Figure 3 "feels right".

On the other hand, in categories 2 to 4 above, we get the impression that many characteristic-defining steps are allocated during the earliest stages of the design (the step of clearly recognizing the position of the "points" /corners). As in Figure 3, it is also possible to arrange the shapes midway and compare the similarity of processes until completion. But in comparison with the Yoshino-style bases, there is a strong feeling that "the fate is greatly increased at the initial steps". Sense of discomfort with Yoshino models On the surface of the finished model achieved by the "Yoshino- style base" method, creases and edges appear in an unfamiliar angular configuration with "irregular and complex rhythm".

It feels like we have reached designs with curious unity through the multiple models, whether it should be said "because it is also" or "because it is so". Even at the stage of the step shown in the middle of Figure 3, "the feeling of unity beyond the differences of the subject" is overflowing. Even now, more than 20 years since the death of Issei Yoshino, I think a finished model associated with a complete form with such "harmonious and strong discomfort" has not appeared by just folding the models following the steps in the diagrams.

Meanwhile, I have heard the following story. In the "Horse" diagram step 2 says: "fold at about 1/3". It turns out that the result is not the best when the folded amount is "perfectly 1/3". There were subtle differences when Issei Yoshino himself folded that step. I think I heard that story when Makoto Yamaguchi, Seiji Nishikawa, Yoshihisa Kimura got together after Issei Yoshino died.

Slight differences in this folding proportions will affect the overall process when advancing to the subsequent steps. Fold creases that cannot be achieved by just folding as shown in the diagram. Strictly speaking, fold to obtain a finished form with subtle but clear differences. Also, there may be variances due to paper size and thickness. In my own creations, while using this kind of delicate techniques flexibly, I continue to be aware of the difficulty of understanding that many folders can't experience the full folding experience just with diagrams.

Figure 1: Horse

Figure 2: Horse step 58 and Apatosaurus step 35

Figure 3: Diagrams by Yoshino, partially modified by Hojyo (Apatosaurus, Horse, Spinosaurus, Tyrannosaurus, Triceratops, Salmon, Boar)

(Page 16) From the Bookshelves of the JOAS Library

Book #58: The Past, Present and Future of the OrigamiUSA Magazine "The Paper"

Article by Marcio Noguchi

In this series, we introduce publication items of interest from among the materials in the Japan Origami Academic Society (JOAS) library. You can search the origami library's collection on the Origami Tanteidan website. For details, please visit <http://origami.gr.jp/Library/>.

Born in São Paulo, Brazil, electrical engineering graduate from São Paulo University. Joined Citibank in 1987, moved to Citibank Tokyo branch in 1991. In 1993, he moved to Credit Suisse Securities Tokyo Branch and finally to the New York branch in 2000. In 2016, he joined EY Japan in Tokyo as a technology consultant. Currently living in Japan, he is a board member and volunteer of OrigamiUSA.

The Japan Origami Academic Society (JOAS) Library collects and keeps books and periodicals on a wide range of origami subjects. The materials also have a valuable historical meaning. A lot of famous origami books have been introduced in this series "From the Bookshelves of the JOAS Library", but this time I would like to introduce you the periodicals of OrigamiUSA, from USA.

Magazines and periodicals from Origami organizations

As one of the main activities of Japan Origami Academic Society (JOAS), six magazines are published per year distributed to subscribers and members. The content of the magazine is specialized on model diagrams, research presentations, interviews, essays, conventions, reports and other origami related and fun information. JOAS strives to offer the highest quality magazine, and you should have one sample issue in hand to appreciate it (*).

(*) Translator' s note: This Digest is distributed together with the magazine.

Just like JOAS, several overseas origami organizations regularly publish their own magazines. Although the contents may differ somewhat, they mainly cover origami artists, works and activities of their own regions and countries.

Paper since 1985.

Summary of The Paper selected issues

Let me present you a summary of some selected issues from the past "Newsletter" and "The Paper"

which available in the JOAS Library.

Issue 18 (May 1985):

Announcement of Honorary Members: Alfred Bestall, Neal Elias, Natalie Epstein, Mick Guy, Toshie Takahama, Akira Yoshizawa

Issue 39 (Spring / Summer 1991):

1991 Convention Report. Number of Participants 600 / Evaluation of Software Drawing Folders: MacDraw, FreeHand 3.0 Other (Contribution: Robert Lang, V'Ann Cornelius)

Issue 43 (Winter / 1993 Spring):

Fumiaki Kawahata in Canada, eat bananas and reveal secrets to boost the brain's imagination for creation / Robert Lang Japan visit, Black Forest Cuckoo Clock exhibit, meets Makoto Yamaguchi for the first time

Issue 48 (summer of 1994):

Organization name change from Friends of Origami Center of America (FOCA) to OrigamiUSA / 1994 OrigamiUSA Convention report - First time attendance: Makoto Yamaguchi, Jun Maekawa, Toshikazu Kawasaki, Tomoko Fuse.

Issue 52 (Fall 1995):

OrigamiUSA' s magazine name change from "Newsletter" to "The Paper" / 1995 OrigamiUSA Convention Report

Issue 74 (volume 2 2001):

3rd OSME (Origami, Science, Math and Education) in California

Issue 88 (volume5 2004):

The cover of "The Paper" becomes full color / Origami Holiday tree grows big (Contribution: June Sakamoto)

Issue 105 (Fall 2010):

"The Fold" OrigamiUSA online magazine issue 1 / 2010 Convention Report, Oversized Origami Event

Issue 117 (Fall 2014):

"The Paper" becomes full color / OrigamiUSA online broadcast classes

Let' s go to the Library

Many new books are published monthly. Good origami books are published one after another. Such new books are indeed good, but there are also lots of good publications available in the library. I think reading books from the library is a good idea. There are many books that are old (out of print). There are books that will help you when you are in trouble. There may be books that will be useful in the future or provide foundational information. There are also interesting, exciting, moving, sad books. It is helpful to keep in mind that there are awesome books available in the library.

In the present era, iPad, Kindle, smartphone, etc. are wide spread and the electronic version of publications became fashionable and making people stay far away from real books. However, I

felt a lot of pleasure when checking the library for physical books and magazines from origami organizations. Also, while reading about activities, events, reports in an origami organization magazine, you will remember good memories of the people involved and appreciate the flow of the time. And, while checking a photo, find out how young they were, I be impressed of the activities that they were involved in the past. In the future, I would like to make more discoveries by effectively utilizing the JOAS Library.

Reference websites:

[1] Japanese Origami Society Library:
<http://www.origami.gr.jp/Library/>

[2] List of overseas group organization journals list (incomplete):
<http://www.origami.gr.jp/Library/ForeignMagazineList.html>

[3] OrigamiUSA The Paper:
<https://origamiusa.org/thepaper>

[4] OrigamiUSA The Fold:
<https://origamiusa.org/thefold>

Photo courtesy: OrigamiUSA

Article contribution: Laura Rozenberg,
OrigamiUSA The Paper managing editor

List of figures:

Figure 1: Logo design of OrigamiUSA's magazine
Figure 2: The Paper Issue 123

Figure 3: FOCA Newsletter Issue 42 (1992)

Figure 4: Newsletter Issue 48 (1994) OrigamiUSA convention. Makoto Yamaguchi, Tomoko Fuse, Tony Cheng

Figure 5: Newsletter Issue 48 (1994) Overseas participants at the 1994 OrigamiUSA convention

Figure 6: Newsletter issue 41 Akira Yoshizawa

"Kabuse Ori" , which translates better to "cover fold" , meaning reverse by "covering" the corner. There are many "technical terms" in the origami world. Terms that have meanings different from those used in everyday life like <box-pleating> and <complex>, terms which seem easier to figure out to the regular person like "half-open fold"(*) or others like "single value molecules"(**) and "4 cranes" which will often generate a "???? kind of face.

(*) Translator's Note: The terms "Hanbiraki Ori" and "Icchi Bunshi" and "Yon-Tsuru" are very technical terms and it looks like they are only used in Japanese Origami. I can't think of one single term that would convey totally their meaning, but the closest would be "Half-Open Fold" , "Single Value Molecule" and "4-Crase Base" .

(**) Translator' s Note: Further discussion about the so called "Icchi bunshi" leads to even more complex realm of term definitions. I have a feeling that the definition of origami design "molecule" is different between the way the Japanese and others.

So, when you think about such origami terms, did you know that there are terminologies that are used for a specific purpose but with different meanings? This time, allow me to pick up some examples of what I call "confusing" origami terms.

Spiral Fold

What kind of folding method comes to your mind when you the word "spiral folding"? Figure 1-A shows a folding technique devised by Toshikazu Kawasaki and used in models like "Shellfish" (named by Kunihiko Kasahara).

However, the one like on Figure 1-B is also called "spiral fold". If I said, "I want to create a snail using 'helical folding'" , without further information, you might wonder "which technique is that?"

In response to this problem, Tomoko Fuse has a book called "Let's draw a spiral", with a special consideration to coin "Kawasaki-style spiral folding" (Figure 1-A).

Preparation Fold

The two "Preparation Folds" items are different in terms of the "content of the preparation".

The first one is "a creative technique to incorporate expression of details, and preparation of areas for later use by creating creases during the prior steps". An example is shown in Figure 2.

And there is also a "preparation folding" process that is often found in the instructions of complex models: "pre-creasing to create crease lines". It is used to create grids for a box pleating models.

Shaping

Many origami models are folded first by creating geometric crease lines as represented by a crease

(Page 18) Here We Are, THE ORRIGAMI TANTEIDAN Misleading/confusing (?) Origami Terms By Hideo Komatsu

Hideo Komatsu – Born in 1977. Board member of JOAS. I was provided several suggestions by Seiji Nishikawa to write this article. By the way, although in "Works of Hideo Komatsu collection" I tried to coin the term "Shita-Ori" ("Primer" Fold) to mean "Pre-Creasing", it looks like it did not become very popular...

This section will explore a wide range of topics related to origami and introduce you to a little interesting trivia fact. We also accept questions, questions, additional information from readers. Please, feel free contact us via email webman@origami.gr.jp.

Trivia 1: The term "Soto-wari Ori" (Outside Reverse Fold) in Japanese was proposed for the Japanese community, who uses the term

pattern. And this base that can then be treated as a "material of shaping" and used to fold the fine details. The folding process beyond the base is what is called shaping.

The other meaning might be a more generic term rather than specific to origami. In other words, after finishing folding the model, you apply glue or insert wires inside and complete it as a single piece. That meaning is described in "The Beauty of Origami" page 208, under a section called "Finishing with glue".

Open-back and "Open-belly" (*)

(*) Translator's Note: the term "Closed Back" more commonly, and to my knowledge the term "Open-belly" is not used in English speaking origami design.

Both terms are used mainly for origami models of animals.

Figure 3 illustrates an example of the base of an animal with its required six points. From that base, we can finish the model by shaping the details of the animal. The first meaning is a concept focusing on the position of paper edges relative to the top or bottom of the body.

Looking at the back of the finished model as shown in Fig. 4-A, you can see the paper edges which looks like openings. This design is called "open back".

The other term focuses on "cross section of the body". As shown in Figure 4-B, the results of the legs differ in its front and back when compared to Figure 4-A. In Figure 4-B, the back looks like wide open, and this is also called "open back". However, the other meaning will happen when the "crack" (paper edges) comes to the belly side, so it will be called "open belly".

Figure 5 shows four possible patterns for each combination. The bubbles with square corners are "based on the position of the paper edges", while the bubbles with rounded corners are "based on the cross-section view of the body". Two out the four patterns have the same name. These two meanings of "open back" and "open belly" were introduced on page 88 of "Genuine Origami" by Maekawa Jun: "Open Back 1 / Open Back 2".

* * *

These are the four terms I wanted to present. If you try to resolve these confusions, I think that you can consider using different words for the meaning (concept) of either (or both) terms. However, one may think that the meaning can be sufficiently judged by the "context" seeing the conditions where the misleading term is used. There are many enthusiastic terms adopted where the writer/person talking and reader/person listening are likely to be sensitive to the context to judge the meaning accurately. Or (something that I myself do repeatedly), speak

without using the misleading word by using a more suitable English word. For example, instead of saying "shikomi-ori" (preparation fold), I use works like "precreasing" or grafting.

Here again, I can think of many paths that a new origami term can take to become established. A case where an individual advocate a term with its definition which becomes accepted; or another situation where an expression originated in a local group meeting spreads out unexpectedly, and so on. Also, we can think about the enthusiast community accepting a term coined by a prominent creator or disseminated through the mass media.

However, the process may not be that simple. In an article presented in the "From the Bookshelves of the JOAS Library" section of Tanteidan magazine issue 112, the late Kosho Uchiyama considered the logical consistency of the terms "inside-reverse fold" and "outside-reverse fold." Due to circumstances, "outside-reverse fold" was superseded by a term that translates from Japanese into "cover fold" (kabuse ori) which describes the technique of folding both sides of the flap down and "covering" it. Using their imaginations, for many Japanese origami enthusiasts, "cover fold" (kabuse ori) was more intuitive and easier to use than outside-reverse fold.

The background of the use of origami terminology is also changing depending on location and time. I think that its present and historical change is quite interesting and carrying on the shoulder the origami culture.

List of Figures:

Figure 2: Examples of "preparation fold" . Crane with open beak and turtle with shell pattern

Figure 3: 1/16 box-pleating simple animal base

Figure 5: The case illustrated in the lower right, where both are called "open back" , is impossible as an actual model (there are some more realistic forms with different structures, but it will be omitted).

(Page 36) Orisuzi ("Fold Creases") Origami Models I Can(not) Fold By Ryuhei Uehara

manage folding the first one. Wow, that was tough!

Next, I started looking a book with Maekawa Devil's diagram. It was 2005, so it took me quite a while. Somehow, I found out that it was published in an old issue of a magazine that was called "Origami Tanteidan". Searching it online, I found out that it is out of stock. So, the only solution left was for me to go to a place that was called "Origami House".

The moment I stepped into Origami House,

instincts told us that "this place is dangerous." Anyway, the clerk looked exactly like Kamiya, the famous Origami Champion. I told that clerk about my search for the back number on the net, he told me that it was not made widely known on the net, but they have a small number of inventory available. Since I was already there, I purchased a copy of "Works of Satoshi Kamiya" and the back number of the Origami Tanteidan magazine. Then, based on the way that clerk responded to my purchase, I was finally convinced "Oh my God. He is the real one!" Anyway, I understood the diagram of Maekawa's Devil. That one, I folded the first one in about an hour.

It has already been 12 years since then. I can now fold the Kawasaki Rose in about 10 minutes, without having to look to the diagram. I can fold Maekawa's Devil in about 30 minutes, with the diagram. However, I did not manage to fold the Ancient Dragon yet. In August 2017, I was at the convention exhibition, where I had the opportunity to appreciate the so-called "reference models" by Kamiya and Hojo. I could not help feeling that the crease lines are somewhat made differently. Rather than "reference models", maybe for me they are "target models".

(Page 37) Origami-Zanmai (This Origami and That)

#87 "Roles of Specialized Media"

By Seiji Nishikawa, JOAS board chair

In this section, I sometimes talk about shogi (Translator's Note: Shogi is a board game also known as Japanese Chess). Originally, I like shogi as a game, but I was thinking to investigate somewhat deeply since I started "Origami Tanteidan Newspaper". Both Shogi and Origami can be a form of artistry backed up by puzzle-like thinking. It is interesting to think about the various similarities and differences, but something made me think was what the Shogi journal publishes every week. One of the big differences between origami and shogi, is the fact that shogi is clearly a game. So, the results of the previous week, such as winning and losing or changes in ranking, are subject to coverage in sports newspapers, sections, discussions, specialized literature, etc. I thought that it may also be something useful for Origami Tanteidan magazine. Since then, it has become a habit for me to buy, almost every week, at a train station shop or convenience store, the Weekly Shogi journal "Shukan Shogi" (Japan Shogi League Federation / Mynavi Publishing). And soon after, I became a shogi enthusiast, knowing something about the names and personalities of 150 professional shogi players. That habit continued

until March 2016, when it came to an end as the Weekly Shogi magazine stopped being published. The closing remarks said, "The change in the environment surrounding the media is remarkable. We decided that Weekly Shogi has ended its role." By the way, in 2017, some shogi topics were reported regularly on the general mass media (almost daily). As you might be aware, it was about the 4-Dan shogi player Fujii Sota who set a record for continuous wins of official games since his debut. I thought that the news on the count-down for this big record was well worth being reported on the general media. But reports in the general media are truly superficial and quite missing details to me as an enthusiast of the subject. While I wanted to read this series of events in articles covered by the Weekly Shogi journal, I thought that there is still a role for the media of continuity.



(Page 40) Rabbit Ear Information

WOD 2017 (October 24th ~ November 11th, 2017)

Once again, it is time to celebrate the WOD events again this year. WOD (World Origami Days) is the celebration of origami activities during the period from October 24th to November 11th. The main purpose is "to share the joy of Origami with many people around the world". This is a call to share activities. OrigamiUSA and JOAS collaborates since 2011 to promote and spread the WOD events.

<My WOD event report>

Origami models folded by you during the WOD period. From Origami House Website (<http://www.origamihouse.jp/wod2017/Application.html>). Please download the "My WOD report" entry sheet, print it, place it next to your model, and take a picture. Also, please upload to Facebook, Twitter, and any other social media. Feel free to choose any origami model, and participation can be individual or in small groups. Multiple entries are also encouraged. Please join to expand the origami joy with as many people as possible.

<Origami Theme Exhibition>

Submit models that fit the theme: Dog, 2018 Chinese zodiac

We ask for models of your own creation. It can be an old or newly created model.

- Exhibition on the Web: Please post using the form on JOAS website available during the WOD period.

- Live exhibition: We will exhibit models at Origami House. Please send us your creative model that is in line with the theme.

<Origami Art Museum>

Also, if you upload a photo under "My WOD Report" or "Origami Theme Exhibition" using the WOD dedicated e-mail address, we will also post the picture on the special page in Origami Art Museum page:

<https://www.origami-art-museum.com>

Please write down the information on model, creator/folder.

WOD posting email address:

wod2017@origami.gr.jp

The Exhibition models will be made public from October 24, 2017

<Simultaneous Exhibition>

- My Best, My Favorite model exhibition by OrigamiUSA and JOAS board members.

In addition, please check the Web page below for OrigamiUSA WOD activities.

<http://origamiusa.org/wod>

11th Origami Tanteidan Nagoya convention registration

As the convention of the Tokai region, the 11th Nagoya convention will be held, moving the venue from last year's Shizuoka to this year's Nagoya. As a special guest, we are inviting Brian Chan. We are looking forward to everyone's participation.

- Schedule: November 18 (Sat) ~ 19 (Sun), 2017

- Venue: Nagoya University of the Arts West Campus

Nagoya Railway (Tokushige · Nagoya Geidai)

About 1 km to the west from the station, 15 minutes on foot

- Origami classroom: (participation application required)

- Dinner Banquet: (only for those who apply) 18th (Saturday)

- Registration fees:

Adults: Tanteidan magazine subscribers 4,500 yen / nonsubscribers 5,000 yen

Students: Tanteidan magazine subscribers 3,000 yen / nonsubscribers 3,500 yen

Guardian-Child discount: Tanteidan magazine subscribers 2,000 yen / nonsubscribers 2,500 yen for each child of (elementary school students not applying guardian-child discount will be treated as "student")

Participation for one single day only will be the

same amount.

About guardian-child discount

With regards to the guardian-child discount, it will be applicable to up to 2 children together with a guardian. Guardians are either their parents or someone who will be responsible for children. Participation fees are required also for guardians, even if they are coming just to accompany the children. The origami paper set in the kit will be for just one, but the name tags and gifts will be distributed for as many individuals registering. All registrants can attend classes.

- Participation fee for dinner banquet: 4,000 yen estimated (1,500 yen junior high school students or younger)

- Accommodations:

Attendees are responsible for their own accommodation arrangements.

- Exhibitions, contests:

A model exhibition zone will be set for all participants. An exhibition by Tokai Friends Association members is also planned. In addition, a creative origami contest will take place (for your own creation models). The best model award and two outstanding prizes will be decided by the popularity vote of convention attendees. We will look forward to many content applications. There will be no need to apply in advance for your models for the creative origami contest. Just bring your models.

- International Origami Collegiate Association (ICOA) Model Exhibition

- Call for teacher and candidates for Japan Origami Academic Society (JOAS) origami instructor certification

We are looking for teachers during the convention. Why do not you join us as a teacher on this occasion?

In addition, we will also certify origami instructors based on the Origami Instructor System of Japan Origami Academic Society (JOAS). So please take this opportunity to apply.

- Special Guest: Brian Chan

Brian Chan had been creating origami designs since 2004, mostly focusing on single sheet square super-complex models.

The 8th Korean Origami Convention Report By Jun Maekawa

On May 19th, 20th, 2017, I participated in the 8th Korean Origami Convention as the special guest. The venue was a complex in the southwest of Seoul with halls, classrooms, dining halls and accommodation rooms, and it counted with about 200 attendees. Kade Chan of Hong Kong was another special guest, and another 10 foreign attendees came from Japan including

Makoto Yamaguchi, Miyuki Kawamura, Beth Johnson (from the US) who was the special guest of the 23rd Origami Tanteidan Convention in Japan, Mark Bolitho (from the UK) and many others. It was Makoto Yamaguchi's idea to create a mutual excitement by linking the conventions in Japan and Korea by making them just one week apart.

Origami enthusiasts from Korea who participated in the convention ranged from middle-aged ladies, to young primary school/university students (mainly male). It closely resembles the demography of the Japanese convention. Also, as in Japan, the young were diligently moving during the convention period. It is interesting that they enjoy folding and displaying "giant origami". The techniques to display the models were done skillfully, so you can appreciate how the models are finished. Yoo Tae-Yong, who experienced an extended stay in Japan and published his Work Collections with Origami House, was one of the "origami youth", who was participating by taking a break of his military service. So, the story goes that he came straight to the convention venue, rather than going to see his parents first.

I gave two classes and an overall lecture. In the lecture, the slides were in English, I presented in Japanese, which was then translated into Korean. Kade Chan's slides were in English and Chinese, presented in English and was finally translated into Korean. In this way, despite of the linguistic differences, origami becomes a kind of common language, so there were no need to worry. The gathering was welcoming, games such as paper airplane contests at the banquet dinner was also fun. Overall, it was a fulfilling 3-days, which included a tour of Seoul city the day after the convention.

As I write this report, circumstances in North Korea is cause of turmoil, but the origami world remains calm and peaceful.

Figures:

- Left: The group on the right are folding an oversized origami decoration base using cardboard, while the group on the left is folding another model
- Center: Line up of oversized models
- Right: Unplanned climax of rock, paper, scissors game during the dinner banquet

Note of the editor: related photos on page 23

The 23rd Origami Tanteidan Convention report By Beth Johnson

This past August, I had the honor of being invited as a special guest to the 23rd annual Tanteidan

Convention in Tokyo. I have attended many conventions around the world, and while they are all unique, they all share the common goal of bringing people together around a shared passion. Tanteidan is no different in this regard, and this year was a truly exceptional experience and one which I will never forget.

The Tokyo Tanteidan is a large convention counting with 400 guests. Attendees range from beginning folders to university professors, and everything in between. The format is like other conventions - it is three days long and includes a mix of lectures and classes. There is a reception with food, drink, and festivities on Saturday night, and an excursion on Monday. Our excursion was to Nikko shrine ("kirei!"), which was followed by lunch at a restaurant famous for its dumplings ("oshi!").

The classes are very diverse, with more design or theory-based classes included alongside traditional models. I took Jun Mitani's class on curved folding and Yoshinobu Miyamoto's class on rotational erection systems - both topics were incredibly interesting and thought-provoking, and completely new to me. Additionally, the folding level tends to be very high, so it is a fun venue for teachers. I taught three models this year (a squirrel, an acorn, and a cardinal), and thanks to strong folders, a helpful interpreter, and a document projector, everything went very smoothly.

I feel so fortunate to be a part of a community that provides such unique opportunities for connection and shared inspiration, regardless of what country you are from, or what language you speak. Japanese culture is so different from my own. It can be challenging and disorienting at times to navigate the cultural differences and the language barriers. But origami helps us bridge that divide, and I feel that my life is so much richer because of it.

All in all, Tanteidan is a lot of fun, and I learned a great deal myself. There were interesting classes, a fun reception with fantastic food, a wonderful excursion, a strong exhibition, and more. But what really makes international conventions so special for me is connecting with new people and experiencing a new culture. Conventions provide such a richer, more immersive experience than if I were simply traveling on my own. And the Tanteidan experience is exceptional in this regard, in large part thanks to Yamaguchi-San, who really goes out of his way to make his guests feel welcome and show them a good time - not only during the convention, but during their entire stay in Japan.

The Primary Activities of JOAS

◆ Publications

Origami Tanteidan Magazine

The Origami Tanteidan Magazine published 6 times per year (for subscribers and members only) exhaustively explores every aspect of origami. Every issue is filled with color photos of recent origami from around the world, containing new diagrams for a complex model, academic articles on the history and design of origami written by experts, interviews with famous folders, essays, and much more!

Origami Tanteidan Magazine Special Issue

The Origami Tanteidan Magazine Special Issue published once a year (exclusively for members) includes diagrams for a model with a lot of steps and other articles that could not be included in the regular magazine due to space limitations.

Origami Tanteidan Convention

Diagram Collection

This book is an annual collection of origami diagrams organized and edited for the Origami Tanteidan Convention. Diagrams for about 50 models from creators around the world are included in this publication, chronicling the forefront of origami creation each year.

Origami Tanteidan Convention

The annual Origami Tanteidan Convention is held every summer at a university in Tokyo.

While primarily a domestic convention, many foreign origami enthusiasts participate, giving lectures, teaching classes, exhibiting models, conversing with attendees, etc. Around 350 people attend. Regardless of subscription or membership, the general public is welcome to attend.

► Lectures and students engage in friendly mutual exchange.

► Interesting lectures by both Japanese and international guests.

Origami Tanteidan Local Conventions

With the support of JOAS, Origami Tanteidan Local Conventions (3 per year) are planned and organized around Japan by the "Friends of Origami Tanteidan Association", each convention having a different regional character being organized locally. Currently, regional conventions are held each year in Kansai (Kobe), Tokai (Nagoya), and Kyushu (Saga).

Friends of Origami Tanteidan

An organizational bulletin for "Friends of Origami Tanteidan" local groups is published in the Origami Tanteidan Magazine. Currently, there are five member groups, in Tokyo, Kansai, Shizouka, Tokai, and Kyushu, each holding regular meetings and a variety of community activities. While most people that attend these local group meetings are readers of the Origami Tanteidan Magazine, it is not a requirement. Anyone can attend!

Meetings on Origami in Science, Math, and Education

Meetings on Origami in Science, Math, and Education (held biannually at JOAS Hall) addresses the influence of origami on fields like history, mathematics, engineering, computer science, education, and the interdisciplinary ways in which origami interacts with them. By collaborating with experts in many fields, JOAS holds regular meetings on these topics.

Origami History and International Collaboration

There is clear evidence that paper was being folded for sculptural and entertainment purposes from the middle of the Edo period in Japan. References to origami in European literature can be found in books at around the same time, although the origins of these references are still being researched.

Concerning Japanese origami, several examples remain from the 10th to 15th centuries of origami being used in traditional samurai ceremonies (Tataukami), and the 1797 publication "Secret of 1000 Cranes" represents this deep history. During the Meiji period, Western European origami (in the Froebel style) began to be combined with the traditional Japanese forms, and by the 1950s, the artistry of origami was already fascinating origami enthusiasts worldwide, paving the way for Akira Yoshizawa and others to expand and develop the art.

Origami organizations have now been formed by enthusiasts all over the world, "Origami" becoming a delightful form of art and entertainment in many countries. JOAS along with organizations from many different countries exchange information and ideas through person to person communication, and engage in research and outreach to develop the growing discipline.

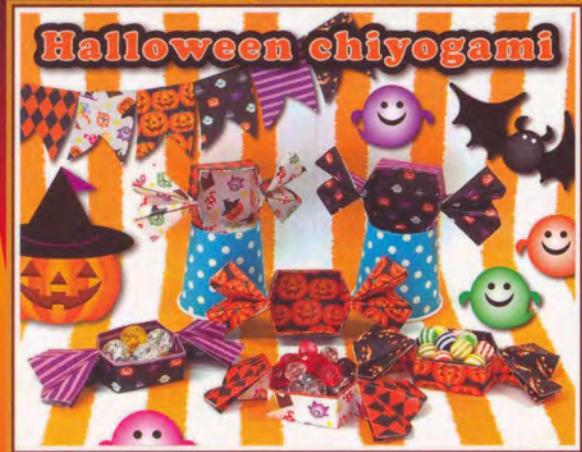
Yoshino Issei Fund

The Yoshino Issei Fund, named in commemoration of the talented origami designer, aims to support the exchange of ideas between the world's origami artists. The fund invites and compensates foreign folders to attend JOAS conventions, and supports young Japanese folders to attend conventions around the world. The fund relies on donations from origami enthusiasts who support its spirit and purpose. Donations are accepted at any time.

◆ Past Invited Artists: 1997 Rick Beach (UK) / 1998 Jeremy Shafer (USA) / 1999 David Derudas (Italy) / 2000 Paul Jackson (UK), Daniel Robinson (USA) / 2001 Mette Pederson (USA), Peter Budai (Hungary) / 2002 Jeannine Moseley (USA), Vincent Floderer (France) / 2003 Robert J. Lang (USA), Jean Baden-Gillette (USA) / 2004 David Brill (UK), Eric Joisel (France), Tom Hull (USA), Nathan Geller (USA) / 2005 Nick Robinson (UK), Jason Ku (USA) / 2006 Robert J. Lang (USA), Nicholas Terry (France), Brian Chan (USA), Jan Polish (USA) / 2007 June Sakamoto (USA), Manuel Sirgo (Spain), Ben Muller (USA), David Brill (UK) / 2008 Eric Joisel (France), Herman Van Goubergen (Belgium), Sipho Mabona (Switzerland), Jeremy Shafer (USA) / 2009 Chris Palmer (USA), Eric Gjerdi (USA), Stephan Weber (Germany), Nguyen Hung Cuong (Vietnam), Tran Trung Hieu (Vietnam), Seth Friedman (USA) / 2010 Anne LaVin (USA), Marcio Noguchi (USA), Lee Jae Gu (Korea), Jeong Ki Dam (South Korea), Jang Yong Ik (Korea), Michael LaFosse (USA) / 2011 Brian Chan (USA), Roman Diaz (Uruguay), Quentin Trollip (Canada), Joseph Wu (Canada) / 2012 Jason Ku (USA), Sipho Mabona (Switzerland), Dennis Walker (Scotland), Hoang Tien Quyet (Vietnam), Jorge Pardo (Spain) / 2013 Heinz Strobl (Germany), Anne LaVin (USA), Robert J. Lang (USA), Nicolas Gajardo Henriquez (Chile), Kade Chan (Hong Kong) / 2014 Jean Baden-Gillette (USA), Alessandro Beber (Italy), Beth Johnson (USA) / 2015 Isa Klein (Brazil), Giang Dinh (USA), Shuki Kato (USA), Fuse Tomoko (Japan) / 2016 Dave Brill (UK), Seth Friedman (USA), Roberto Morassi (Italy), Michelle Fung (USA), Patty Grodner (USA) / 2017 Joseph Wu (Canada)

ハロウイン

Halloween chiyogami



両面プリントのちよがみです。



¥300
(税抜き)

●写真是印刷ですので実際の商品とは色が異なる場合があります。

※表示価格には消費税は含まれておりません。※内容・デザインは一部変更になることがあります。

本社 〒120-0044 東京都足立区千住緑町2-12-12 TEL03-3882-8161

大阪支店 / 名古屋営業所 / 福岡出張所



株式会社トーヨー

<http://www.kidstoyo.co.jp>